
無神論者たちの唄

すずひめ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

無神論者たちの唄

【Nコード】

N3684Z

【作者名】

すずひめ

【あらすじ】

『三つめ』の核爆弾が新宿に投下されて数十年。かつて『日本』と呼ばれた国は、合衆国政府の元で管理統治されていた。政府とながりの深い医療系企業『ナショナル・エイド社』の特殊作業員・橘 菊花は、ある日同社の研究者である川島博士に呼び出され、一枚のメモリーチップを託される。「この中に入っている実験データを社外に持ち出して、世間に公表して欲しい」次々に襲いかかる刺客たち。メモリーチップに隠された驚くべき秘密とは――？ 手術によって特殊能力を身につけた女作業員が、企業の陰謀に巻き込ま

れ翻弄されていく様を描きます。常にピンチと隣り合わせで進行する、ノンストップ・ヒロインアクション。 ■ 二日に一度、午後十時更新にて集中連載いたします。よろしくお願いします。なお本作は、2010年11月から2011年2月にかけてpixivにて連載していたものの転載です。

前章（１）「川島病院」

「……クドウさん……聞こえますか、クドウさん……もう大丈夫ですからね」

朦朧とする意識の中、誰かが彼を呼ぶ声が聴こえた気がした。張りのある、若い女性の声だった。

絶え間ない銃声と爆音の直中にいたはずだった。

次々と倒れていく仲間と、鼻を衝くような血の臭い。瓦礫となった街は爆発による粉塵でほんの数メートル先も見えなかった。彼自身の体も埃にまみれ、口の中がパサパサに乾いていた。度重なる爆音で一時的に遠くなった耳は、なかなか聴力を取り戻さなかった。身体じゅうに纏わりつく血液は、仲間のものなのか、敵のものなのか、それとも彼自身のものなのか。

ぼろぼろになった軍靴越しに、何か小さなものを踏んだ。その瞬間、凄まじい熱波に体が吹き飛ばされるのを感じた。

「クドウさん！　しっかりしてください！」

とうとう、天使がお迎えに来たか。良かった、もうあんなところはごめんだ。俺を早く天国へ連れて行ってくれ。

彼は目を閉じ、天使の声に身を委ねた。

■

ケイイチがはっきりと目を覚めたのは、何度も何度も夢と現の間を行き来した後だった。

最初は自力で瞼を開けることもかなわず、ようやく開いた薄目にも視界にぼんやりともやが掛かり、辺りの状況は判別できなかった。ただ酷い音を聞き続けた耳に、あの天使の声が彼の名を呼ぶ声だけははっきり聴こえた。

「クドウさん？　気が付かれたんですか？　ああ、まだ無理に動いちゃ駄目ですよ」

彼はただその声に導かれるように、意識の糸を辿った。

徐々に視力を取り戻した目が最初に輪郭を捉えたのは、白っぽい服を着た女性の姿だった。

何故戦場に女がいるのかと意識が混濁したが、その白いシルエツトから、彼女は看護師なのではとぼんやりと思った。だとしたら、ここは病院だ。

ふつくらとした胸元――白衣の左胸に『川島』と書かれたネームプレートが見えた。そのすぐそばに、サイドでまとめられた長い髪が揺れていた。その栗色を上へと辿っていくと、優しい笑顔を浮かべた若い女性の顔があった。

「クドウさん、クドウ・ケイイチさん。おはようございます！　あなたが目を覚ましてくれて、嬉しいです」

「な、まえ……」

ケイイチは擦れた喉を振り絞って声を出した。

「え？」

「ど、して……おれ、の……なまえ……」

途切れ途切れだったが、彼が意図したことはちゃんと伝わったらしく、彼女は苦笑しながらもそれに答えた。

「だって、あなたの認識票に、そう書いてあったから。クドウ・ケイイチ三等陸尉さん」

馬鹿な質問をしたと、ケイイチはぼんやりした頭でこっそり恥ずかしくなった。

自衛隊に所属する者に与えられる、いわゆるドッグタグ。戦場で力尽きたとき、死体が原形を留めていなくても個人を識別するため

のものだ。彼のドッグタグは、まさしくその役目を果たしたのだ。
「クドウさん、あなた運がいいわ。ここに運び込まれるのが早かったから、処置が間に合ったの」

川島看護師は心底嬉しそうに、そう言った。

ケイイチは試しに右手を動かそうとした。指先が僅かに動くのを感じたものの、それはなぜか自分のものではないような違和感があった。右手だけではない。両脚の感覚もいまいちで、何だか借り物のような気がした。明確に感覚があるのは左手だけだ。自分の身体はどうなってしまったのか。問い掛けるように視線を向けると、彼女はその意図も汲み取ったようだった。

「ああ、まだ動かない方がいいですよ。クドウさんの手足は——」
彼女はそこで一瞬言葉を切り、躊躇うように視線を動かした後、再びゆっくりとした優しい声で続けた。

「クドウさんの手足は、少し、損傷が酷かったから……右腕と両脚を義体に交換する手術をしたの。明日から徐々に、リハビリを始めましょうね」

——ギタイ？

一瞬、何と言われたか分からなかった。

「ごめんなさい、聞き慣れない言葉よね。義体、つまり造り物の身体のこと。義手と、義足を手術で付けたの。大丈夫、慣れれば元の自分の手足とほとんど同じに動かせるようになるはずだから。元通りの生活を送れるようになるわ」

何だって？

ケイイチは耳を疑った。つまり自分の手足はあの爆風で吹き飛ばされて、なくなってしまったということだ。そして何が何だか分からないうちに、勝手に偽物の手足を付けられてしまったということらしい。

「……！　っ……、おれの……手、足は……！」

突然ケイイチはパニックを起こし、暴れ始めた。

「どこに……どこにやった……！」

川島看護師は短く悲鳴を上げ、しかしすぐに我に返って彼をなだめようとした。

落ち着いて、大丈夫だから、きつと慣れるから、ごめんなさい、ごめんなさい。

繰り返される彼女の声を聴きながら、ケイイチは暴れ続けた。

やがて駆けつけた他の病院スタッフによって鎮静剤を打たれ、彼は再び深い眠りに落ちていった。

■

かつて、この国は四つの島全てが自国の土地だったという。

『三つめ』の核爆弾が新宿に落とされ、国としての機能が停止したのはもう二十年も前のことだ。

以来、この国は合衆国の管理統制下に置かれている。それゆえ核爆弾は合衆国の陰謀ではないかという噂が、当時からまことしやかに流れていた。各地で合衆国に対する反乱が度々勃発し、また放射能汚染は依然としてあちこちに残されている。この国はかつての繁栄からは見る影もない程、治安の悪い国となってしまった。

現在、『国内』には合衆国の管理する『統制区域』と、合衆国の管理を離れて自治を取る『自治区域』、そのどちらにも属さず無法地帯となっている『スラム』が混在している。

かつてこの国の政治経済の中枢だった国家機関は全て『統制区域』に入った。公務員は合衆国の所属となり、自衛隊も合衆国軍の傘下に入る形となった。

一年ほど前、反合衆国を掲げる反乱軍によって『統制区域』内の主要施設をランダムに爆破するというゲリラ攻撃が行われた。事態を収拾するため、合衆国軍はいくつかある『自治区域』の中でも反乱分子が多くいるコマキ自治区（旧愛知県）を攻撃した。それが原

因となり始まった『内戦』は、現在も激しさを増す一方で、收拾の目処も立っていない。

ケイイチの所属部隊は、戦闘の最も激しい地区に配置されていた。合衆国軍は、自衛隊を優先的に危険地区に置いているようだった。何日も続く攻防に、街はすっかり破壊された。ケイイチの部隊が反乱軍の残党を探して街を搜索していたとき、運悪く敵側の奇襲攻撃に遭ってしまったのだ。

他の者がどうなったか分からない。ケイイチは足元に仕掛けられた地雷を踏み、右手と両足を失った。死にかけているところを運よく誰かに助けられ、病院に収容されたのだった。

ケイイチが手術を施した医師と顔を合わせたのは、それから数日後のことだった。

実際はそれまでも何度か様子を見に来ていたのだが、ずっと眠っていたため彼にとってはそれが初対面だったのだ。

「初めまして、クドウさん。川島と申します」

落ち着いた声で自己紹介した白衣姿の中年男性は、あの看護師の女性と同じネームプレートを付けていた。

「調子はどうですか？」

川島医師は、定型句のようなその疑問詞をケイイチに投げかけた。銀縁眼鏡の奥の瞳からは、これといった感情が読み取れない。

「僕の手足、どうなってるんですか？」

ケイイチは医師の質問には答えず、質問を返した。自分の手足がなくなってしまったという事実は、そう簡単に受け入れられるものではない。見知らぬ右腕と両脚には、何の感覚もなかった。

医師は右手で顎を触り、少し考えるような間を取った。

「まずは、勝手に手術を行ってしまったこと、謝りたいと思います。しかし、あなたの身体の損傷状態では、あのまま放っておいたら命はなかったでしょう」

「そのことについては、いいんです。命を救ってもらったことにはむしろ感謝してくらいた。僕が聞きたいのは、この手足は一体何なのかってことなんです。それから、ここは一体どこなんだ。僕の仲間？ 敵は？ 僕を自衛隊員と知りながら助けてくれたところを見ると、先生は敵ではないようですけど……」

川島医師は小さく二、三度頷き、ゆっくりと説明を始めた。

「……まずは二つ目の質問からお答えしましょう。一般的に、義肢——『義足』や『義手』と呼ばれるものは、シリコンやゴムでできているものが多い。切断部位に装着して、失った手足の代わりとするものです。しかし、私があなたに施した義体化手術はそうじゃない。その手足は、あなた自身の身体から直接『生えて』います。人工的なものではありませんが、もとの骨や皮膚と同じものでできています。今はまだ違和感があると思いますが、そのうち元のように思い通りに動かすことができるようになるでしょう」

『義体化手術』というのは、患者を一旦コールドスリープ状態にし、仮死状態になった生身の切断部位と人口義肢とをある特殊な遺伝子情報を組み込むことで接続する手術だと、川島医師は説明した。「それから二つ目の質問ですが……ここはコマキ地区の外れにある『川島病院』です。だから一応自治区域の中ということになります。この病院は、表向きには大学の研究施設のように装っています。ここが病院だということを知っているのは、私と私の娘、数名のスタッフ、そしてここで義体化手術を受けた患者さんのみです」

「つまり、無認可の病院ということですか？」

川島医師は、そこでひとつ咳払いをした。

「有り体に言えば、そういうことです」

ケイイチは少し怪訝な顔をした。

「自治区域内の、無認可の病院——そして自衛隊員も治療する」

自治区域にある病院は自治区民しか利用できないのが通例だった。同じように統制区民は統制区域内の病院を利用することになっている。

「先生、失った身体から直接生える義肢のことは、僕は今まで一度も聞いたことはありません。自衛隊の中でも戦闘で手足を失った者がいました、皆シリコン製の装着するタイプの義肢を使っていた。僕は医療のことには詳しくないが、それはまだ認可の下りていない新しい技術なんじゃないですか？ だから無認可の施設で、不特定多数に手術をしている……」

ケイイチの言わんとすることを察したように、川島医師は慌てて口を挟んだ。

「私は患者さんを実験対象と思ったことは一度もありません。確かに、失った手足に義肢を接続する遺伝子を発見したのは私ですが……」

川島医師は、ケイイチの目を正面に見据えた。
「私は医者です。一人でも多くの命を救うため、ここで病院を開いています」

川島病院には、十名ほどの患者が入院していた。

ケイイチのような自衛隊員もいれば、コマキ自治区に暮らしていた一般市民もあり、そしてなんと合衆国軍兵もいた。皆この内乱で負傷して身体の一部を失い、義体化手術を施された者ばかりだった。かつては敵同士だった者も、ここではただの入院患者だ。川島医師に命を救われた者として、それぞれがただの一人の人間として生活していた。外はいまだに酷い内戦が続いていたが、川島病院の中だけはユートピアのように平穏だった。

ケイイチの病室には毎日川島看護師が訪れて、身の回りの世話や義肢のマッサージなどをしていた。しかし彼を意識の混沌の中から呼び戻した天使の声は今やすっかり色を失くし、遠慮がちに必要な最低限の言葉を発するのみだった。

ケイイチは、最初の日に朦朧とした状態だったとはいえ彼女の前

で取り乱して暴れたことを思い出した。ひよっとしたら彼女は、俺が勝手に義体化手術をされてしまったことに腹を立てていると思っているんじゃないだろうか。彼はそう思った。

「カワシマさん」

ある日マッサージを受けているとき、ケイイチは思い切って声を掛けてみた。看護師ははっとしたように顔を上げ、小さな声で「はい」と返事をした。

「カワシマさんは、あの先生の娘さんなんだよね？」

「ええ、そうですけど……」

「君のお父さんは、なぜこんな危険な場所で治療を続けているのかな。俺は最初てつきり、先生が自分で発見した技術を試したいが為に、ここで無認可の病院を開いているんじゃないかと思ったんだけど。ここの連中の様子を見ると、そうじゃないって気がしてきたんだ。君だって、お父さんについてこんな危険なところで看護師をしている。一体、何のためなんだ？」

川島看護師は少し驚いたような表情をしたが、やがてすっかりした声で話し始めた。

「……三年前、私の兄が、内戦に巻き込まれて死んだんです。クドウさんのように、爆発で手足を吹き飛ばされて、たくさん血を流して。まだその当時は、義体化の技術が完成していなくて……父は出来る限りの手を尽くしたんだけど、結局助からなかったの。その時今のような手術ができていたら、きっと兄は助かったわ。だから父は、兄を助けられなかった代わりに、ここで一人でも多くの人を助けようとしているんだと思います」

彼女はじっとケイイチの目を見つめた。

「それは私も同じよ。だから私、あなたが目覚めてくれて、本当に嬉しかったの」

ケイイチはその真剣な眼差しに、一瞬はっとした。彼女の瞳の中に、芯の強さが映っていたからだ。

「そうか、俺は君に助けられたんだな。君の声で俺は目覚めたんだ」

川島看護師は彼の言葉に少し顔を紅くして、恥ずかしそうに首を横に振った。

「そんなに大きなことじゃないわ。クドウさん自身の生命力が強かったから、きつと無事に目覚めたんだと思いますっ！」

彼女の様子に、ケイイチは思わず噴き出した。少し慌てたような仕草が、妙におかしかったのだ。一人で笑い続ける彼に、彼女は戸惑ったような表情をしていたが、やがてつられて笑いだした。

ひとしきり二人で笑った後、彼女は鈴のような声で言った。

「……ハルカです」

「え？」

「私の名前」

天使の声がこぼれる唇が、優しい自然な笑みのかたちを作っていた。

「よろしくね、ケイイチさん」

■

川島遙は、入院患者の間ではアイドルのような存在だった。

決して美人とは言えないが、笑うと顔全体がくしゃっとなり、口元にえくぼができた。ややふっくらとした女性らしい体つきに、いつもきつちりとサイドでまとめられた柔らかな栗色の髪。何より、誰もが安心感を覚える優しく美しい声の持ち主だった。戦場近くの医療施設であるにも関わらず、彼女がいるだけでぱっと花が咲いたように空気が明るくなった。

ケイイチはいつしか、ハルカに対して好意を抱くようになっていた。彼女の丁寧な看護やちょっとした気遣いに、酷い戦争で傷つき壊れかけていた心が徐々に癒されていくのを感じた。爆風と硝煙の中で薄れかけていた太陽が顔を出し、彼の心を温めていくような気

がした。

ケイイチがようやく義体の足で立ち上げられるようになったのは、入院から数ヶ月が経ったところだった。

彼はいつもの病室で、ベッドに腰掛けた状態からハルカの助けを借りてゆっくりと立ち上がった。最初はうまく脚に力が入らず身体を支えるのに苦労したが、向かい合った彼女の腕に支えられながらどうにか直立することができた。

「ケイイチさん、おめでとう！ 最初はバランスが取りにくいかも知れないけど、大きな第一歩ね。きつとすぐに自由に動き回れるようになるわ」

ハルカは顔全体でにつこりと笑い、心から嬉しそうにそう言った。今まで気づかなかったが、こうして立ち上がってみるとハルカは思ったよりも小さかった。

これまではベッドに横たわった状態か、良くて腰かけた状態でしか彼女と接していなかったたので、見下ろされることばかりだった。「看病される」という状況がハルカを少し大きく見せていたが、実際彼女の身長は女性としては平均的だ。もともと背が高くてがっしりした体つきのケイイチから見れば、大抵の女性は小さくて当然だった。

しかし彼の感じたハルカの「小ささ」は、そういうことではなかった。このように向かい合って並んでみると、彼女はここの看護師というよりもずっと、川島遥という一人の女性だったのだ。

その彼女が今、至近距離で彼を見上げている。

優しい笑顔が目の前で揺れる。触れ合った腕が熱い。

気付いた時には身体が勝手に動いていた。

ハルカに支えられて立った状態から、両腕をすりと彼女の背中にまわす。ハルカの身体はケイイチの腕の中にすっぽりと納まる格好になり、その時一瞬彼女が驚いて身を緊張させたのが分かった。

「ケ、ケイイチさん……？」

「ハルカ、ごめん。しばらくこうさせてくれ」

ハルカが身じろぎするのも構わず、ケイイチは唯一生身の左腕に力を込め、彼女の腰をそっと引き寄せた。

彼女の身体はとても柔らかく、頬に当たる髪からは甘い匂いがした。心臓の鼓動が、嫌でも早くなる。

一瞬のような永遠のような時間の後、ケイイチはゆっくりと身体を離れた。

すると途端にバランスを失い、背にしたベッドにすんと腰を下ろす格好となった。ふと見上げると、ハルカは色白の頬を真っ赤に紅潮させ、戸惑ったように立ち尽くしていた。

「ごめんな、急に。びっくりしたよな？」

ハルカは震える唇でどうにか言葉を紡いだ。

「なんで……どうしていきなり、こ、こんなことを……」

「なんでって……そりゃ、君が好きだから」

ケイイチは、躊躇うことなくさりとそう言った。するとハルカは、泣き顔と怒り顔が入り混じったような複雑な表情を作ったかと思うと、思い切り首を横に振った。

「か、からかわないでください！」

そう言い放つと、彼女は病室から走って出ていってしまった。

「からかってなんかいないんだけど……」

ケイイチはひとりごちたが、ふと、病室、白衣のナース、手足が不自由な患者の男……と考えを巡らせた後、からかったと思われるも無理はないかも、と思い当たった。確かにこの内戦以降、ずっと溜まっていることは否めないが、決してそういう目で彼女を見たことは……なくはないかも。

ケイイチはため息をつき、やれやれ、と思った。

翌日、ハルカはいつもの時間にケイイチの病室を訪れた。もう来

ないのではないかと思っていたので、彼は内心驚いた。

しかしやはり昨日の出来事から彼を警戒しているのか、彼女はリハビリのマッサージをしながらもずっと怒ったような表情をしていた。

ケイイチは気まずさを感じながらも、彼女のそういう表情を新鮮だと、こっそり思った。

次の日も、更にその次の日も、ハル力はやってきた。しかし相変わらず怒った表情を崩さず、必要以上の言葉も発しなかった。

「あのさ、ずっと不思議に思ってたんだけど」

思い切って声を掛けると、ハル力は一瞬びくりと身体を震わせた。「この病院の物資、どこから調達してるんだ？ 表向きは大学の研究施設ってことにしてるって話だけど。それにしても、手術や治療に必要な消耗品はやっぱり誤魔化せないと思うんだ」

ハル力は肩をすくめた。

「……私の母が、ナショナル・エイド社にいるの。ここの物資はうまく母に工面してもらっているんです」

「なるほど、医療一家って訳だ」

ナショナル・エイド社は国内最大手の医療系メーカーである。

もともとは小さな薬品メーカーだったが、内戦が始まって以降合衆国軍へ医療物資を提供し、一気に規模を拡大させた。今や薬品だけでなく、様々な医療機器の開発も行っている。まさに戦争特需の恩恵を受けた企業だ。それゆえ、統制区域以外での評判は最悪だった。

「じゃあ、お母さんの立場は危険なんじゃないか」

「そうよ。危険を承知の上で、私たちをここへ送り出してくれたの」ケイイチは、いつか彼女が内戦で兄を失ったという話をしていたことを思い出した。一人の若者の死が、家族を強く結びつけたのだらう。

考え込む彼をよそに、ハル力はてきぱきといつもの処置を終え、

片付けを始めた。

「……まだ怒ってる？」

「さあ、何のことかしら」

彼女は視線を手元に落としたまま、感情のこもらない声で淡々と言った。

まいったな。彼は頭を掻いた。

「ハルカ、この前はいきなり抱き締めたりして悪かったよ。でも勘違いしないでほしいんだが、別に俺は君の身体に触りたいとか、そういうんじゃない……」

ばん！

ハルカが救急箱を思い切りよく締める音が部屋じゅうに響き、一瞬遅れて静寂が訪れた。

「ケイイチさんのバカ！ 何にも分かってないんだから！」

その言葉を受け、ケイイチは思わずムツとした。

「バカとは何だよ。確かに俺は君に酷いことをしたかもしれないが、そこまで言われる筋合いは……」

「あるわよ！ ……好きな人からいきなり身体を触られたら……シヨックに決まってるじゃない！」

ケイイチは今にも泣き出しそうなハルカの顔を見つめ、言葉を失った。なんだって？ すきなひとからいきなりからだをさわられたら？

「もうやだ……」

ハルカはそう言うなり、そのままへたりと座り込み、顔を両手で覆って泣き出した。ケイイチもこれには完全にまいってしまった。彼女はどうか、自分のことを好いてくれていたようだ。しかし不用意に取った自分の行動が、彼女を傷付けてしまったらしい。

「ハルカ、ごめん……」

ケイイチは少し躊躇いながら、義手の右手をハルカの頭に置いた。触覚はまだ完全ではないが、柔らかい髪だと分かった。

「俺、無神経だった。でも信じてほしい。俺はハルカ、君が好きな

んだ」

今度は細心の注意を払いながら、彼は両手で彼女の震える両肩を包んだ。

「俺は君のおかげでこうして生きてる。だからこれからも、君と一緒にいたいんだ」

ハルカが少しだけ顔を上げた。涙で濡れた瞳が彼を見つめる。ケイチは彼女を抱き締めたくなる衝動をどうにか抑えた。

「ハルカ、俺に君の手伝いをさせてくれないか。前みたいに動けるよう、頑張つてリハビリするよ。君が俺にしてくれたように、俺も人の命を助けたい」

どのみち自衛隊では、彼は死亡扱いになっているだろう。それだけでなく、あのような酷い場所に戻る気はさらさらなかった。それよりもここで看護師として人助けをするが、よっぽど人として正しい道のように思えたのだ。もちろん、ハルカと一緒にいたいという気持ちもあったが。

ハルカはまだ少ししゃくりながら、たっぷりの涙声で呟くように言った。

「……じゃあ、明日から、リハビリ厳しくしなきゃ……ね？」

柔らかい夕陽の差し込む病室に、二人の笑い声が響いた。

前章（２）「運命の夜」

それから三年の時が流れた。

内戦は相変わらず続いていたが、コマキ自治区の戦闘は緩やかに納まりつつあった。

それゆえ、以前のように即刻義体化手術が必要な酷い状態の負傷者が運び込まれることはなくなった。その代わり川島病院では内戦で負傷した患者だけではなく、一般の病人も受け入れるようになっていた。すなわち病気で失った臓器の代替として、義体化技術を応用したのだ。そのせいか相変わらず表向きは病院の看板を出していなかったにも関わらず、川島病院の評判は徐々に広まっていた。

しかし病院としては無認可というリスクを負っているため、信用のおけるルートからの口利きでやっていた患者以外には断固として大学の研究施設を装い、追い返した。例えそれが、今すぐに義体化手術をしなければ助からない状態の者であっても。そのため川島医師は、医者としての使命と自らの保身の間で、葛藤していた。

ケイイチは三年前に付けた右腕と両脚の義肢をすっかり自分のものにしており、負傷前と同じように生活できるようになっていた。

彼は川島病院の看護師として、かつて自分がハルカにしてもらったように、義体化手術を受けた患者たちの身の回りの世話をしていた。同じ仕事をしていると、ハルカの仕事がいかに丁寧で心のこもったものか身にしみて実感することができた。その度にケイイチは彼女を尊敬し、また愛情の念が深まっていくのを感じた。

ある日ケイイチが院長室を訪れると、川島医師は電話中だった。しかし彼が入って来たことに気づくと、医師は慌てたように受話器

を置いた。

「あ、すみません、お電話中でしたか」

「ケイイチくんか。いや、大した電話じゃないからいいんだ」

川島医師の態度に若干の違和感を覚えたが、特に追求はしなかった。このところ彼は、いつも何か思い詰めたような難しい表情をしているのだ。ケイイチは気にしないふりをして、要件を伝えた。

「三。二号室のトバリくんのことですが、移植した人工心臓の動きが芳しくありません。手術してから何度か目は覚ましたんですが、意識がはつきりしないようです。たまに苦しそうにうなされていきます」

一週間ほど前に重度の心臓疾患で運び込まれた少年のことだった。「そうか。人工心臓の移植はまだ症例が少ないからな。理論的には問題ないはずなんだがな。分かった、一度様子を見るとしよう」

三。二号室の前まで来ると、ちょうど部屋から慌てた様子のハルカが出てきた。

「あ、お父さん、ケイイチさん……！ 大変なの、トバリくんの身体に変な痣が……！」

「なんだって？」

急いで病室に入ると、ベッドには痩せた少年が横たわっていた。そのはだけた胸元の、ちょうど心臓の部分——先日手術を行った部分——に、黒い浮腫が浮かび上がっていたのだ。

「これは……腐敗……？」

川島医師が呟くのとほぼ同時に、トバリ少年の身体につなげられた心音図のモニターが直線を描き、ピーという無機質な音を発した。彼の心臓が動きを止めた証拠だった。

「先生、心臓マッサージしますか？」

川島医師は眉間に皺を寄せながら、低い声で呟くように言った。
「いや——このまま解剖に回す」

トバリ少年の遺体を運び入れた後、川島医師を一人残し、ケイチとハルカは一階の手術室を後にした。

「ケイチさん、ちょっと時間いいかな。少し相談したいことがあるって」

仕事に戻る途中の廊下でそう言ったハルカの顔は、酷く青ざめていた。

「俺の部屋で話そうか？」

ケイチは彼女が言わんとすることを察し、二階東端の自室へと促した。

「お父さんのことなの」

ハルカは彼の部屋のベッドに腰を下ろすなり、思い切ったように言葉を発した。

「俺も気になってた。最近の先生、ちょっと様子がおかしいよな」

「そうなの……さっきだって、あの状況で延命措置をしないなんてこと、今までなかったのに」

あのトバリ少年のことを、目の前で消えていく命ではなく、研究対象として見ていた。川島医師の言動は、ハルカの目にはそんなふうに映った。リスクを冒しても人の命を救いたいというこれまでの父の意思からは、考えられない行動だった。

ケイチは頷いた。

「それに、このところしきりに誰かと電話をしているみたいだ。何となく、様子がおかしい気がする」

「そうね。最近——いいえ、重病患者を断り始めたところから、少しおかしくなったように思う。そりゃあ私だって、助かる命を見捨てること、なかなか受け入れられないけど……」

ハルカは視線を自分の膝に落とし、じつと何かを考え込むように押し黙った。ケイチは肩をすくめ、努めて明るい声を出した。

「ともかく今は、俺たちにできることをするしかないよ。きつと、先生は先生なりに考えがあると思うんだ。先生を信じよう。ほら、患者さんの巡回の時間だ。ともかく、今入院している患者さんのケ

アをしつかりしないと」

「そうね、そうよね……ありがとう、ケイイチさん」

彼女は自分に言い聞かせるように呟き、顔を上げて立ち上がった。そしてケイイチの部屋から出ていく間際、ふと彼を振り返り、少し元氣のない笑顔で言った。

「……また今夜、来るわ」

ガラスの割れる音で目が覚めたのは、その日の夜中だった。

かつて些細な音でも目覚めるように訓練を受けていたケイイチは、その小さな音でベッドから飛び起きた。心臓が早鐘を打つ。何かとつもなく嫌な予感がした。

ケイイチは隣で眠っているハル力を揺り起した。最初は少し寝ぼけていた彼女だったが、彼のただならぬ様子を感じ取り、覚醒したようだった。

二人はすばやく服を着、ゆっくりと部屋の戸を開け、廊下の様子を伺った。

「何か聞こえる」

ケイイチは薄暗い廊下に目を凝らしながら、耳を澄ませた。微妙ではあるが、一階から複数の足音が聞こえた。それに混じり、プシユン、プシユンという音が断続的に響く。ケイイチは背中に冷や汗が伝うのを感じた。

ハル力が小さく声を漏らす。

「何の音？」

「銃声だよ……サイレンサツきの」

何故、今ここで銃声が聞こえるのだ？ ケイイチは表情を強張らせながら、抑えた声で言った。

「俺が様子を見てくるから、ハル力はここで待ってる」

「嫌よ。こんな怖いところに、一人で置いていかないで」

ハル力はケイイチの腕にしがみついた。彼は一瞬迷ったが、様子

を見に行つた隙に彼女に危険が及ばないとも限らないので、承諾した。

二人が廊下に踏み出そうとした矢先、例の足音が階段を上つてくるのが聞こえた。なるべく音が立たないような足運びで、複数名が上つてきたようだった。少なくとも一般人ではない雰囲気である。

ケイイチは慌てて扉を閉め、とりあえずクローゼットに身を隠した。

彼はハルカの身体を抱き締めながら、廊下の物音に耳を澄ませていた。どうやら賊は一室一室の扉を開け、発砲しているようだった。眠っている入院患者や病院スタッフに向けて発砲しているのだろうか。このままでは、この部屋に彼らが侵入してくるのも時間の問題だ。

「ハルカ、ちよつと腹を括ってくれよ」

彼女は言われるがまま、こくこくと頷いた。

ケイイチの部屋の扉が賊によつて開かれたのは、そのすぐ後だった。真つ先に部屋に入つて来た黒ずくめの男は、すばやく銃を構えて部屋の中を確認した。ベッドの中、机の下。見たところ、人影らしきものはない。この部屋には誰かがいたような熱反応があったのだが。

男は扉の死角となつていた壁面に、クローゼットの戸があることに気づいた。ゴージャルのサーモスコープは、その扉の奥に熱反応を感知している。

彼はゆつくりとした足取りでそこへ近づき、銃を構えながら扉の取っ手を手前に引いた。

しかしそこにはいくつかのジャケットやコートが掛っているだけで、誰もいなかった。つい先ほどまでここに誰かが隠れていたのだろつ。

彼は他の仲間に、ここには誰もいないから次へ行け、と手で合図を出した。彼自身も別の部屋へ向かおうと廊下へ出る。しかし最後にもう一度部屋の中をちらりと見やった際、窓がわずかに開いていることに気づいた。

彼は再度ケイイチの部屋に踏み込み、窓を開け、外を確認した。

ここは二階であり、当然誰もいなかったが、その窓の真横には梯子があった。恐らく、外の配管点検用の梯子だろう。一階から屋上に向けて壁に取り付けられていた。

病室のある一階か、院長室のある三階か。この部屋の住人は、この梯子から上もしくは下へ逃げたのだろう。一階は既に制圧済みであり、見張りに二人残してあった。この部屋は構造からして病院スタッフのものだ。危険に気づいて院長室に向かった可能性がある。

男は部屋を出ると、二人の部下を連れて三階へ向かった。

ケイイチとハルカは、梯子を伝って階下の部屋へと降りていた。

その部屋は、一ヶ月ほど前に右脚の義体化手術を受けた男性患者の病室であった。

「フジノさん！ 大丈夫ですか！」

二人は即座にベッドに駆け寄った。しかしその瞬間ハルカは小さく悲鳴を上げ、両手で顔を覆った。

その男性はベッドに横たわったまま、頭を撃ち抜かれていたのだ。ケイイチは薬莢と血の混ざった臭いに顔をしかめた。一体何が起きているというのだ。何が目的で、犯人グループは無抵抗の人間を射殺したのだろうか。

統率の取れたやり口、サイレンサツきの銃。相手はよく訓練されたプロの集団であることに間違いなさそうだ。しかしこの病院がこのような襲撃に遭う理由は、彼には全く分からなかった。引くかか

「とにかく、先生を探そう。いつも夜は、研究室に籠っていたはずだよな」

研究室はこのフロアの西端。今二人がいる病室とは、逆の端に位置する。つまり、一階を端から端まで移動しなければいけないということだ。

病室の中から耳を澄ませたが、廊下は静かだった。犯人グループは皆二階に移動したのだろう。しかし見張りを残している可能性も否めない。

ケイチは用心深く、ゆっくりと扉を手前に引いた。そしてその隙間からそろりと顔を出し、廊下の様子を伺った。この廊下は一直線で、ちょうどその半ばほどのところに犯人の一人が背中を向けて立っているのが見えた。その男がゆっくりとこちらを振り返る。ケイチは慌てて顔を引っ込め、すばやく、しかし静かに扉を閉めた。まずい。気づかれたかもしれない。

彼はハルカに、柱の陰に隠れるように合図した。いよいよ正念場か。彼はごくりと唾を飲み込んだ。

一階を見張っていた男は、視界の端に何かが動くのを捉えていた。廊下の突き当たりの部屋の辺りだ。既にこのフロアは、入院患者もスタッフも全員始末している。自分と、建物の入り口を見張っている仲間の、二人しかいないはずだった。気のせいかと思ったが、万が一仕留め損ねがあってはいけない。

男はゴーグルのサーモスコープをオンにして、ゆっくりした足取りで東端の部屋に近づいて行った。

サーモスコープは、東端の部屋の中に熱反応を感知していた。壁越しでは反応は薄くなるが、明らかに生きた人間のものだ。

男は銃を構えながら勢いよく扉を押し開けた。すると柱の物陰に、

スコープが人型の熱反応を捉えた。彼はそこへ銃口を向け、ゆるりと近づいて行く。

しかし次の瞬間、男は後頭部に強烈な衝撃を受け、地にねじ伏せられた。

何が起こったか理解できないまま無理矢理首だけで振り返ろうとしたが、続けざまに棒のようなもので頭部を殴打された。

ゴツ、ゴツ、という鈍い音が容赦なく何度も響き、ついに男は動かなくなった。

絶命した侵入者を見下ろして立っていたのは、ケイイチだった。

彼は部屋に置いてあった松葉杖を手に、部屋の扉の内側に潜んでいたのだ。

すぐさま、ケイイチは男が持っていた銃を手に取る。見覚えのある型の銃だった。確か、内戦で一緒になった合衆国兵が持っていたものと同じものだ。またこの男がしているゴーグルは、合衆国兵が暗所で作戦を行うときに使用するサーモスコープだった。

何故合衆国軍が？

ケイイチは混乱したが、今はゆっくりそのことを考えている暇はなさそうだ。

「ハルカ」

ケイイチは柱の陰に向かって声を掛けた。おずおずと姿を見せたハルカは、暗闇でもそうと分かるほど青ざめ、がたがたと震えていた。

「俺の傍を離れるなよ」

彼は銃を手に、廊下へと踏み出した。

そろそろと廊下を進んで行く二人の目には、部屋から出ようとしたところを撃ち殺された女性スタッフの亡骸が映っていた。

仕事熱心で、患者想いのスタッフだった。恐らく、物音に気づい

て様子を見ようと外へ出たところを襲われたのだろ。ケイイチは胃の辺りがきゅっと締め付けられたような息苦しさを感じた。

この建物は、一階の半ばほどに玄関がある。ケイイチは廊下を少し進んだ辺りで、闇に溶けるような黒づくめの男の姿を捉えた。不審な物音に気づいて少し持ち場を離れたもう一人の見張りの男だった。

「ハルカ、走れ！」

ケイイチの合図で、ハルカは廊下の西端、川島医師がいるであろう研究室に向かって走り出した。

その一瞬、走り抜けていく彼女に気を取られてできた男の隙を、ケイイチは見逃さなかった。

躊躇いなく引き金を引いた一発目の銃弾は、男の左大腿に命中した。

痛みの余り動きが鈍った男に、ケイイチは続けざまに二発目、三発目を撃ち込んだ。

それぞれが右頸部、眉間を撃ち抜き、ぱっと花が散ったように血液が噴き出す。

そのまま男の身体は崩れ落ち、動かなくなった。床に赤い血だまりが広がるのを見て、思わず胃液が逆流しそうになるのを彼は堪えた。

かつて自衛隊員として内戦に参加していたころ、ケイイチには戦う理由が何一つ分からなかった。そのことについて、上官によく怒鳴られたものだった。彼は射撃の腕は悪くなかったが、いざ銃撃戦となると引き金に掛けた指が石のように硬直し、撃てなくなってしまうのだ。自分の撃った銃弾が、いつか誰かの命を奪うかもしれない。そう思うと怖くて堪らなかった。

しかし今は違う。自分の身と、何よりもハルカの身を守るため、ケイイチは躊躇うことなく引き金を引いていた。ハルカを失うことに比べたら、それ以上に怖いことなどなかったからだ。彼は今しがた撃ち抜いた男の死体に一瞥もくれることなく、先に研究室に入っ

て行つた彼女の後を追つた。

「川島先生？」

研究室に、医師の姿はなかった。もしこの部屋にいたのであれば、奴らに殺されていてもおかしくないが、死体すらなかった。よもや今夜に限って院長室にいたのだろうか。だとしたら、もう助けに行くことは不可能だ。

ハル力はへたりと床に座り込み、自分自身を抱き締めた。そして今にも泣き出しそうな顔で、かたかたと震えていた。殺された入院患者やスタッフ、ケイイチが殺した二人の侵入者。看護師という仕事柄、人の生き死には常に身近に関わつてきた彼女だが、今夜の出来事はそれまでの日常から余りにかけ離れていた。加えて、彼女の父親は行方知れずだ。

身を震わせるハル力を、ケイイチは思わず抱き寄せた。

「怖い目に遭わせてごめん」

ケイイチはハル力の髪をゆっくり撫で、肩を抱いた。

川島医師が見つからない以上、一刻も早くこの建物から脱出しなければならぬ。しかしそうこうしているうちに、再び複数の足音が一階に下りてくるのが聞こえた。三階まで制圧し終えた犯人たちが、戻ってきたのだ。

まずい。奴らはすぐに、仲間が殺されていることに気づくだろう。そして仲間を殺した者がどこに潜んでいるか、再び建物じゅうを隈なく探すに違いない。この研究室に彼らが踏み込んでくるのも、もう間もなくだろう。この部屋には脱出できるような窓もないのだ。焦る気持ちとは裏腹に、打つ手は何もなかった。

足音が、二人のいる部屋に近づいてくる。

諦めかけたその時、ケイイチの目には信じられないものが映った。研究室の床の一部が、独りでに動いたのだ。

ごとりと音を立てて外れた床から、なんと川島医師がひょっこりと顔を出した。

医師はそして、険しい表情で言った。

「ハルカ、ケイイチくん。早くこの中に入るんだ」

研究室の隠し階段を降りた先は、だだっ広い地下室になっていた。上の研究室は書斎と言っても差支えないような雰囲気だが、この地下室は紛れもなく「研究室」だった。中央に手術台があり、四方の壁に備え付けられた棚にはびっしりと何かのホルマリン漬けが並べられていた。

ここで川島医師が何を行っていたのか、想像しようとするともた胃が締め付けられた。彼は医者である前に、研究者だということなのかもしれない。

「二人とも無事だったか」

川島医師は少し安堵したような表情を見せながら、そう言った。

ハルカは戸惑いがちに辺りを見回し、問い掛けた。

「お父さん、この部屋は……？」

「ここは私の研究施設だ。義体化技術をより確実なものにするため、密かにここで研究を重ねていた。たまたま地下室にいたから、侵入者に気づかれずに済んだようだ」

医師の言葉に、ケイイチはおずおずと口を開く。

「先生、そのことなんですが……」

ケイイチは侵入者たちがつけていたサーモスコープのことを説明した。また彼らが合衆国軍兵に支給される銃を所持していたこと、統率のとれたプロの集団であることも付け加えた。先ほどは運よく見つからずに済んだが、研究室を隈なく熱感知されればこの地下室が発見されるのもはや時間の問題だ。

ケイイチの話を聞いて、博士は唸った。

「そうか、それは厄介だな。恐らく奴らの目的はこの私だろう。それにしても全員を皆殺しにするとは」

「先生、あいつらは一体――」

ケイイチが一番気になっていたことを聞こうとした瞬間、上の部

屋の扉が開け放たれる音が聞こえた。

「説明したいところだが、時間がないようだ。あいつらはサーモスコープを使っているんだろう。私に良い考えがある」

医師はそう言うと、地下室の隅にある大きな装置の前まで二人を案内した。それは棺桶のような形をして、蓋の部分がガラス張りになっているものだった。同じものが横に並んで二台、置かれていた。「これは新型のコールドスリープの装置だ。君たち二人は、これで一時的に眠りなさい。そうすれば、奴らのゴーグルにも熱反応が映らなくなるだろう」

「しかし先生は……」

「私のことは心配いらぬ。奴らの狙いは私だ。私一人であれば、どうにか切り抜けられるだろう」

ケイイチとハルカは顔を見合わせた。一体どういうことなのか。聞きたくて堪らなかったが、医師の言うとおり時間がない。選択の余地はなさそうだった。

「私の身が無事ならば、危険が去った後でコールドスリープを解除しに来る。しかしそうでない場合は、最長一年でタイマーが切れるようになっている。そうならないことを祈るが、もしもの時はケイイチくん、ハルカを頼む」

いまいち釈然としない部分はあるが、医師の真剣な眼差しにケイイチは頷く他なかった。そういえば久しぶりに、川島医師の目を真正面から見据えた気がする。そこにはここ最近の浮かない色はなく、信念を貫き通す確かな意志があった。

二人はそれぞれ装置の中に横たわった。

ケイイチは義体化手術を行った際に一度コールドスリープを経験しているはずだったが、意識がなかったためどのようなものか全く知らなかった。

「おやすみハルカ、ケイイチくん」

川島医師はそう言うと、装置の蓋をするスイッチを押した。

蓋が閉まると、装置の中は完全な密室だった。やがて、装置内部は霧状の冷却麻酔剤で満たされていった。

意識が落ちる一瞬前、ケイイチは薄もやの掛ったような声で呟いた。

「ハルカ……目が覚めたら、俺と結婚してくれ」

その声が、ハルカに届いたかどうかは分からない。だが、微かにくすりと笑う声が聞こえたような気がした。

ケイイチは、いつもと変わらないハルカの優しい笑顔を瞼の裏に見た。そして意識は暗闇の中に落ちていった。

第1話：一ヶ月前「特殊工作員 橘 菊花」

彼女はその薄暗い部屋で、パソコンのディスプレイをじっと見つめていた。

作業進度を示すゲージは、33%、34%と少しずつ伸びていく。ぴったりとした黒いボディスーツがモニターの明かりを反射し、彼女の身体のラインを淡く浮かび上がらせていた。55%、56%。

彼女は部屋の外——くぐもった非常灯の明かりを漏れさせる廊下——を気にしながら、この永遠のような時をじっと耐えていた。焦りは禁物だ。このデータのコピーを完了させて無事に持ち帰らなければ、綿密に練った計画が台無しになる。博士の研究も、完成が遠くなることだろう。だから失敗は許されない。89%、90%。

そのとき廊下の方から、カツカツという足音が近づいてくるのが聞こえた。彼女は身を緊張させ、右大腿のホルスターに挿した銃のグリップに手を伸ばす。警備員だろうか。懐中電灯のような光が、廊下に面した曇りガラスをちらちらと鈍く照らしていた。98%、99%。

「データの保存が完了しました」という文字がモニターに映し出される。警備員が鍵を開けるのに手間取っている間に、彼女はすばやく端末からメモリーチップを抜き取り、電源を落とした。

扉が開けられるが早いか、彼女はその瞬間に右の足首をぐつとしながら、反動で高くジャンプした。空中に舞い上がった身体は、そのまま天井の通気口に吸い込まれていった。

見られたかもしれない。

彼女は暗い通気ダクトの中を匍匐前進しながら、脱出経路を頭の中に展開していた。後ろでひとくりにした長い黒髪が肩口に垂れ、一步一步と進む度に揺れる。道すがら通気口金の網から真下の部屋

の様子を伺うと、複数の警備員がばたばたと走り回っているのが見えた。どうやら大事なデータを盗んだ犯人を捕まえるために、警備体制が強化されたらしい。姿を見られないよう、彼女は身をよじらせて金網を避けながらすばやく通過した。

まっすぐ行つて突き辺りを右。二区画目の角を左。焦つて道を間違えたら元も子もない。正面の梯子を下れば、地下水路へと脱出できるはずだ。

彼女は手探りで一步步確実に歩みを進め、辿り着いた梯子を一気に駆け下りた。足を着いたところは、水路の中の細い支流だった。ちよろちよると細い溝を流れる水はすぐ先で本流と合流していた。ごうごうと大きな音が鳴り響き、彼女の足音を掻き消す。

懐中電灯を点けて用心深く進み、本流に出る。

その瞬間、彼女の耳はかちやりという僅かな音を捉えた。

彼女は反射的に銃を抜き、構えた。しかし突然眩しい光を当てられ、目が眩んでしまう。

気づけば――三人の男が、彼女に対して銃を突き付けていた。この状況で抵抗する手はない。彼女はゆっくり両手を上げながら、懐中電灯と銃を下に落とした。

「ほら、俺の言つた通りじゃねえか。脱出するとしたら水路だつてな」

リーダーらしき男が、下品なダミ声で言つた。彼らの持つ懐中電灯の逆光で、顔ははっきりと確認できない。

「これで手柄は俺たちのもんだぜ」

その男が大きな声で笑うと、他の者も声を合わせて笑つた。

彼女は手を上げたまま、目だけで辺りの様子を伺つた。この柄の悪い三人は雇われ警備兵のようだが、手柄を立てようと単独行動を取つたのか他に警備員らしき者の気配はない。彼女に銃を向ける男以外の二名は、既に銃を下ろして辺りの様子をきよろきよろと伺つていた。

「しかし、いい女じゃねえか。おねえちゃん、単独犯とはやるねえ」

リーダー格の男は、彼女の身体を舐め回すように見て、下劣に唇を歪ませた。汚い乱杭の歯が、ちらりと見えた気がした。

「本当にあんたが盗んだデータを持ってるか、ちよっと調べさせて貰うぜ」

男がいやらしい手つきで彼女の身体に触れようとした、その瞬間だった。

ごく僅かにできた隙を突いて、彼女は男の顎に掌底を喰らわせた。その衝撃で脳震盪を起こし上体をぐらつかせた男の鳩尾に、思い切り右の拳を叩き込む。女性の、いや人間の力とは思えない強烈な一撃にその男の大柄な身体は吹っ飛び、反対側の壁に叩きつけられて崩れ落ちた。

他の二人はその一瞬の出来事に呆気にとられ、大きく隙を作った。彼女は向かって左手にいた男の側頭部に、回し蹴りを喰らわせる。右膝が彼の頭蓋を砕く鈍い音がした。

その間どうにか態勢を立て直した最後の一人が彼女に向けて発砲したが、彼女はそれを背中ぎりぎりかわし、振り向きざまの反動を利用して彼の顔面に右ストレートを叩き込んだ。

ほんの、五秒程度の間の出来事だった。彼女を取り囲んだ三名の警備兵は、あっという間に戦闘不能状態となった。

彼女はゆっくりとした動作で愛銃を拾い上げた。最初に倒したりリーダー格の男の呻き声が、僅かに耳に届く。彼女はその男の頭部を躊躇うことなく撃ち抜いた。他の二人に関しても、念のため同じように頭部を撃ち、とどめを刺す。

やれやれ、私としたことが抜かったな。

彼女は小さく溜息をつき、水路からの脱出口であるマンホールを屈指した。

■

翌日、彼女はとある会社のビルにいた。ナショナル・エイド株式会社、シミズ支社。シズオカ統制区の外れにある、ここが彼女の勤務先だった。

本日の彼女は、細身のグレーのパンツスーツに黒の華奢なパンプスという姿だった。どこからどう見ても、一般の会社員だ。首から提げた社員証にはこう書かれていた。

「特別情報部第三課 副主任 橘 菊花」
タチバナ・キツカ。それが彼女の名前だ。

キツカは朝一番から課長に呼び出され、昨日の作戦の報告と入手したデータの提出を求められた。彼女はデータの入ったメモリーチップを差し出した上で、侵入からデータ奪取、脱出までの経緯を口頭で報告した。

脱出の際に三名の警備兵を殺害したことについては特に咎められなかったが、報告しながら胸の中に苦々しいものが広がっていくのを感じた。問題にならなくとも、ミスはミスだ。結局、口頭で報告した事項を本日中に文書にまとめて提出するよう指示され、キツカは解放された。

馬鹿馬鹿しい、と彼女は思った。結局文書で提出するのなら、わざわざ口頭で報告する必要などないではないか。もしくは口頭で報告するのであれば文書は省略して良いという決まりに、すれば良いのに。結局ここは「会社」であり、彼女はその末端社員に過ぎないということだ。命を張って行った仕事は結果だけが文書となって、社内の上層部に流れていくのだろう。

キツカは自分の席に戻り、パソコンを立ち上げた。社内のイントラネットにログインし、報告書フォームを探す。定型書式に従って先程口頭報告したのと同じ内容を入力していく。備考欄に警備兵三名殺害の旨を記入する際、再び苦い気持ちになった。痕跡は最小限に抑えて、撤退したかったのに。

かたかたとタイピングを続けていると、キツカに声を掛ける者が

あつた。

「よう、タチバナ。昨日はお疲れ様。大変だったみたいだな」

振り向くと、熊のような風貌をした大柄な男が立っていた。同じ三課に所属する守野大介だ。

彼女は手を止めて立ち上がり、お疲れ様ですモリノさん、と短く返事をした。

「脱出ルートを警備兵に先回りされるなんて、私もまだまだです」

「それにしても、その三人の警備兵をうんも寸もなく瞬殺しちゃうなんて、お前らしいな」

モリノは人の良い笑顔を浮かべながら、豪快に笑い声を上げた。

「ま、何にせよ目当てのデータは手に入ったんだし、どうせこちらの素性は特定できやしねえんだ。気にすることねえよ。今日は早めに帰ってしっかり休めよ」

彼はキツカの肩を労うようにぽんぽんと叩き、自分の席へ戻っていった。彼女は少し胸のつかえが取れたようにほっとした気分になり、かたく結んでいた口元を緩めた。

モリノはキツカより三年ほど入社年次が早く、若手の多い三課では兄貴分だった。孤立しがちなキツカのことにもいつも気にかけてくれる。彼女にとっては、数少ない理解者とも言える存在だった。少し心が軽くなったような気がして、彼女は報告書の作成に戻った。

特別情報部第三課は、特殊任務を行う部署だ。

競合他社の機密情報の奪取や潜入捜査など、いわゆる企業スパイ活動を仕事として行っている。中には要人暗殺を含む任務もあった。その活動はナショナル・エイド社内でもトップクラスの機密事項であり、同課は表向きにはイントラネットの調整・管理を行う部署ということになっていた。実際、任務のない時はその仕事を行っていたので、裏で彼らが何をしているか社内では気づく者はいなかった。

三課の任務は危険が伴うものも少なくないため、所属メンバーは

全て義体化手術によって特殊な身体能力を身に付けていた。キツカも例に漏れず、その一人である。彼女は、右腕と右脚、そして心臓を義体化していた。昨日の任務中に発揮した人間離れた俊敏性と攻撃力は、戦闘用義体の力に拠るものだ。彼らは事故や病氣等で失った身体の代わりに義体化している訳ではない。純粹に能力を高めるために、手術を受けた者ばかりだ。

しかし、キツカの心臓だけは違った。彼女の本当の心臓は、五年前にシズオカ統制区にて反合衆国を掲げる過激派が起こした暴動に巻き込まれた際、合衆国軍兵が誤射した銃弾によって撃ち抜かれ動きを止めてしまったのだ。運び込まれたナショナル・エイド社の研究施設にて、彼女は人工心臓を取りつける手術を受け、一命を取り留めた。

その後彼女は右腕と右脚を戦闘用義体に付け替え、そのまま同社の作業員となつて特殊任務を遂行する日々を送っているのだった。

午前中に報告書の提出を終えたキツカは、社員食堂で昼食を摂っていた。

彼女は余程のことがない限り、一人で行動することが多い。三課の機密事項を漏らさないためということも勿論あったが、それ以上に彼女には他人を寄せ付けないオーラがあった。

切れ長の伏し目がちな瞳に、すつと通った鼻筋。少しぼつてりした唇に、小さな顎。背中までまっすぐ伸びた黒髪はいつも後ろでひとくくりにされており、彼女が身動きする度にさらさらと揺れた。すらりとした長身、長い手足。均整の取れた美しいプロポーション。人目を引く美女ではあるが、多くの者は彼女に対して冷たい印象を抱く。何しろ、極端に表情が乏しいのだ。クールな目元が、彼女を常に不機嫌そうに見せていた。また女性にしてはきつぱりとした言葉遣いも、彼女をより取っつき難く思わせる一因になっていた。

だからキツカに話し掛ける者は、モリノの他には一人くらいしか

いなかった。

「ここ、空いてるか？」

そう聞くなり返事も聞かずに彼女の正面の席に腰を下ろしたのは、仕立ての良いスーツを着た優男だった。同じ三課の同期、相馬要二郎だ。その瞬間に彼女は、気づかれない程度にその形の良い眉をひそめた。

「お前、昨日の潜入作戦の話、聞いたぞ」

ソウマの声には、若干ではあるが揶揄するような響きがあった。

「撤退の時に警備兵に見つかって、待ち伏せされたらしいな」

キツカは返事の代わりに、彼の顔に一瞥をくれた。彼は小馬鹿にしたような目で、彼女のことを見ていた。こいつは性格の悪さが顔に出ている。

「お前、最近気を抜いてるんじゃないか？ 俺だったらそんなへまはしないけどな」

この男は本社採用の、いわゆるエリートだ。キツカとは同期入社でありながら、地元採用の彼女に対して軽んじるような態度を初めから取っていた。ところが入社後まもなく合同で行った任務で、彼女の方が手柄を立てた。彼にはそれが気に入らなかったらしく、以来何かにつけキツカに絡んでくるのだ。

「何が言いたい？」

キツカは怪訝な表情を作って、ソウマを睨んだ。それを見た彼は、少し大袈裟にかぶりを振った。

「別に。深い意味なんてないよ」

昨日は任務でミスをして、今日はソウマに嫌味を言われる。まったく、冗談じゃない。

彼女は相手にするのも馬鹿らしいとばかりに小さく溜め息をつき、席を立った。

「タチバナ」

立ち去ろうとするキツカの背中に、ソウマの声が掛かった。

「たまには同期同士、飲みでも行こうぜ」

彼女が軽く振り返ると、ソウマのにやにやした笑顔が目に入った。

——嫌な男だ。

「……考えとく」

キツ力は視線すら合わせず、冷たい声でそう言った。彼女なりの皮肉だ。当然、彼と飲む気などひとつかけらもない。

「相変わらず可愛げのない女だな」

ソウマの馬鹿にしたような声を背中であきながら、キツ力は苛々と食堂を後にした。

第2話：一日目（1）「メモリーチップ」

キツカが研究棟への呼び出しを受けたのは、それから一ヶ月後のことだった。

研究棟は、彼女が勤務するシミズ支社ビルのすぐ隣にある。普段は用事がないため、滅多なことでは立ち寄らない建物だ。

「呼び出し」と言っても、課長経由ではない。直接キツカの携帯端末に連絡があったのだ。正式な指令であれば、必ず課長経由で連絡が入る。つまり、今回は正式ルートではない呼び出しということだ。

キツカは研究棟の中の、とある一室の扉を叩いた。

「博士、タチバナです」

中からどうぞという男性の声が聞こえた。

扉を開けて中に入ると、銀縁眼鏡を掛けた白衣姿の中年男性と、モリノがいた。呼び出されたのは自分一人だと思っていたため一瞬驚いたが、キツカは何でもないふうにもリノに対して軽く目礼をして、博士に向き合った。

「お久しぶりです、川島博士。何かご用でしょうか」

「ああ、一ヶ月ぶりだったかな。わざわざ出向いてもらって済まないね、キツカくん。心臓の調子はどうかね」

川島博士は眼鏡の奥の目をわずかに細めた。

彼こそがキツカに人工心臓移植手術を行った命の恩人であり、また三課の人間に義体化手術を施した人物だった。命を救ったせいかわ彼女に対しては他の者よりも気に掛けているような素振りを見せることがたまにあった。

「ええ、お陰さまで良い調子です」

キツカは僅かに微笑みを作り、柔らかい声でそう答えた。その表情を見れば、大抵の男はくらりと来るだろう。周囲から冷たい女だ

と思われる彼女であつたが、実際はそうではない。ただ、明るく柔らかに振る舞う必要性が極端に限られているだけである。特に社内では。

博士はうんうんと頷いてから、真顔に戻った。

「さて、君たち二人を呼び出したのは、極秘で頼みたいことがあるからだ」

「博士の頼みだったら、何だってお受けしますよ」

な、とモリノがキツ力を見る。彼女は軽く頷いてそれに答えた。

その様子を見た博士はひとつ咳払いをしてから、神妙な面持ちで話を始めた。

「これから私が君たちに頼もうとすることは、完全に私の独断によることだ。正直言つて、私の申し出を受けることは、会社を裏切る行為と等しい。恐らく、もうこの会社には戻つて来れなくなるだろう」

博士のただならぬ様子に、キツ力とモリノは顔を見合わせた。

「……つまりそれは、博士ご自身がこの会社を裏切るということでしょうか」

キツ力は落ち着いた声でそう尋ねた。博士は深く頷いた。

「そうだ。本来であれば、私一人で行動を起こすべきなのだが……私の行動は本社から見張られていて、自由に動くことができない。そこで君たちを信賴して、是非ともお願いしたいことがある。巻き込む形になつてしまつて、申し訳ないが」

モリノは大きな身体を少し縮めて、促すように博士を見つめた。

「それで、一体どんなことですか？」

博士は数秒考え込むように黙っていたが、やがて白衣のポケットから二枚のメモリーチップを取り出し、二人に差し出した。

「この中に入っているデータを、社外に持ち出して欲しい」

二人は困惑した表情で、渡されたチップと博士の顔を交互に見た。「この中には、私の行っている研究の実験データが入っている。これをマスコミに持ち込んで、世間に公表して欲しいのだ」

キツカは思わず口を開いた。

「博士、それは一体……」

「私は本社からの命令で、とある研究を進めてきた。それは君たちも知っての通りだろう。君たちに行った戦闘用義体の手術もその一環だ。その研究が、一ヶ月程前にキツカくんが入手してきてくれたデータによって、一応の完成形となった。しかし――」

博士は一旦そこで小さく息をついた。そして迷うように数度瞬きをしてから、ゆっくりと話を再開した。

「私は、人間が踏み込んではいけない領域に足を踏み入れてしまったのだ。あれは人智を超えた研究だった。私はそれを自覚しながら、ここまで進んでしまった。研究者としての自分の性に、心底吐き気がするよ」

彼の顔に、深い後悔の色が浮かぶ。

「一体何があったんです？ 少なくとも我々は、博士の研究のおかげでこうして効率良く仕事ができています。皆博士に感謝しています。何か事情があるなら、ぜひ教えてください」

モリノが真摯な瞳でそう言った。しかし、博士は首を横に振った。「君たちに無理な依頼をしておきながら申し訳ないが、私の研究の中身は――このデータの中身は、知らない方がいい。君たちはただ、私に言われて仕方なく、メモリーチップを運ぶだけだ」

つまり最終的に罪をかぶるのは自分だけで良いと、博士の言っていた。二人を巻き込むことに対する、彼なりの最大限の配慮だった。

キツカは酷く困惑していた。

彼女が任務を遂行してきたのは、命を救ってもらった恩からだっただ。つまり川島博士の力になればと、どんな不法で危険な仕事も行ってきた。

しかし彼女の入手してきたデータのせいで研究は良からぬ完成を遂げ、結果的に博士を深い葛藤の淵へと追い込んでしまったようだった。会社を裏切ること自体は然程重大なことではなかったが、自

分が博士の申し出を受け入れ遂行した結果彼の立場が一体どうなるのかと考えると、容易に返事のできるものではなかった。

「……分かりました。メモリーチップをお預かりしましょう」

返答に詰まるキツカの傍らで、モリノがそう返事をした。彼女は驚いて、思わずモリノの顔を見た。しかしその表情から、彼もまた苦渋の末返事をしたのだと分かった。

「ありがとう、モリノくん。……申し訳ない」

博士はモリノの右手を両手で握り、心から済まなそうな、しかし強い意思の光を湛えた瞳でそう言った。キツカはその様子を見て、心が固まるのを感じた。博士も悩んだ末、自分の信念に従ったが故の決断なのだ。何より、キツカのことを信用してくれた。

「博士、私もお受けします。必ずこのデータを、マスコミに持ち込みます」

キツカはしつかりとした口調でそう言った。川島博士は彼女に向き直り、同じように彼女の手を握った。

「ありがとう、キツカくん。君のことは娘のように思っていた。それをこんな風に巻き込んでしまい、本当に申し訳ない」

にわかに胸に熱いものがこみ上げてくるのを、キツカは感じた。博士に組み込んでもらった借り物の心臓が、とくと脈を打った。彼女は唇に微笑みを形作る。

「いいんです、博士。お役に立てるのなら」

博士は何度も二人に礼と謝罪の言葉を言った。そしてまた元の落ち着いた様子に戻った。

「しつこいようだが、これは会社の意向に反して、私の独断で行っていることだ。特に本社側の人間に悟られないよう、気をつけて欲しい」

そこで初めてキツカは気づいた。三課の中で地元採用なのは、彼女とモリノの二人だけだ。あとの者は皆、本社採用だった。

「この私からの申し出を受けたことで、君たちに危険が及ぶかもしれない。実験データが持ち出されたことを知ったら、本社は死に物

狂いでそれを回収しに来るだろう。でも信じて欲しい。君たちは私の……」

何故かそこで、博士は一旦言葉を切った。

「……本当に、研究者というのは嫌な生き物だな。君たちを実験対象と思ったことはないのだが。自然に口をついて出てしまいそうだった。『君たちは私の“最高傑作”だ』とね」

博士は自嘲気味に笑った。

「なあに、我々にとっちゃ、それは最高の褒め言葉ですよ」

モリノが豪快に笑う。キツカもつられて笑みをこぼした。にわかに和やかな空気が流れた後、博士が彼らをまた正面から見据えて言った。

「いずれにしても、君たちの無事を心から願っている」

「ええ、博士もご無事で」

「ここからは別れて行動した方が良さそうだな」

川島博士の部屋を出た後、モリノがキツカにそう言った。

二手に分かれれば、任務を遂行できる確率は二倍になる。ただし同時に、情報が漏れるリスクも二倍となることも忘れてはならない。しかし、彼らはプロだ。

「そう言えば、俺が個人的に使ってる携帯端末があるんだが……」

モリノはそう言っ、ポケットをごそごと探り出した。取り出したのは、手の中にすっぽり収まるサイズの端末だった。あまり見ない型だ。

「普段は音楽プレーヤーとして使ってたんだが、普通の携帯端末だ。お前にこれを渡しておくから、万一何かあった時に連絡をくれ。俺も何かあったら連絡するから、電源入れといてくれよ。一応会社とは関係のない端末だが、会社側がどんなルートで追ってくるかわからないから、最終手段として考えてくれ」

キツカは端末を受け取り、簡単に使い方のレクチャーを受けた。

彼女は礼を言った。

「お前が優秀なのは良く知ってるが、無茶はするなよ。お前、怪我の治癒スピードは一般人と同じなんだからな」

義体化手術によって人並み外れた頑丈な身体と回復力を持つモリノは、念を押すようにそう言った。キツ力は小さく微笑みを作った。

「モリノさんも、油断しないでくださいね」

「言うじゃねえか。俺を誰だと思ってんだ」

彼は明るい声で言った。

「それじゃ、もう会えないかもしれないけど……無事でな」

「……モリノさんも、お気をつけて」

二人は固く握手をした。モリノの手はごつごつして、そして温かった。

キツ力は研究棟でモリノと別れた後、情報三課の執務室に戻った。早退届を出すためだ。

早退の理由は適当に作った。あまり詳細な進捗報告をせずともきつちりと任務完遂するキツ力を信頼しているのか、課長からは特に何も疑われなかった。

加えて引き出しやデスク周りなどから、貴重品や身分証明になるものを回収し何食わぬ顔で鞆に詰める。恐らくもうここへは戻ってこれないのだ。

荷物を持ち、パソコン端末をシャットダウンしたのを確認して、席を立つ。スーツの襟を正すふりをして、内ポケットにあるメモリーチップと携帯端末に触れる。それらはそこに入れた時のまま、きちんと収まっていた。

他のメンバーにお疲れ様です、と平坦な声で挨拶をし、部屋を出る。エレベーターホールに続くリノリウムの廊下には、キツ力のパンプスのヒールがコツコツと床を叩く音がやけに大きく響く。

そのときだった。

「おい、タチバナ」

突然背後から声を掛けられ、キツカの心臓は一瞬動きを止めた。ゆっくり振り返ると、今しがた執務室に戻ってきたらしいソウマが立っていた。

「なんだ、出かけるのか。お前、モリノさん見なかったか？」

「……いや」

キツカは表情を変えずに、短く答えた。

本社側の人間に悟られないように。川島博士の言葉が頭に過った。「そうか、朝から見かけないんだよな。今日モリノさんは外出の予定だったか？」

「……さあ、知らない」

事実、モリノがどのようなルートで行動するのかキツカは知らなかった。ソウマは軽く腕を組み、彼女の素っ気ない返答に対して僅かに眉根を寄せた。

「用事はそれだけか？ 私は忙しいんだ」

ソウマが何か突っかかってくる前に、キツカは淡々と言い放って踵を返した。何だよ、と彼が小さく文句をこぼすのを後ろに聞きながら、彼女は再び歩みを進めた。幸い、ソウマはそれ以上彼女を深追いつてこなかった。

エレベーターを待つ間、乗り込んでから一階に着くまでの間、一階ロビーからビルを出るまでの間——キツカはさざめく心臓を身の内に抑えながら、会社の外に出るまでの時間をまるで永遠のように長く感じていた。

■

少女が朝の買い出しを終えて店に戻ってきたのは、午前十一時ごろだった。

ランチの営業は十一時半からなので、ギリギリだ。本当はもっと早く戻るつもりだったのだが、果物屋の女将の世間話につかまってしまったのだ。

「ただいま、マスター。遅くなってごめんなさい」

少女はカウンターの奥にいるマスターに声を掛けた。エプロンを着けた壮年の男性が、それに笑顔で応える。

「おかえり、ユナ。頼んだものは買ってきてくれたかい？」

「うん、全部買ってきて来たよ」

ここはハママツ自治区の端にある小さな喫茶店だ。正確に言えば、昼間は喫茶店なのだが、夜になると酒を出すショットバーに変わる。古い店だが、人を安心させるような落ち着いた雰囲気のある店だ。スラムに隣接した地域のためあまり治安は良くないが、マスターの人柄と美味しい料理のおかげで、この店はいつも常連客で賑わっていた。

「果物屋の奥さんから、気になる話を聞いたの。また、薬の値段が上がるって」

ユナは買ってきたものをカウンターに並べながら、先ほど仕入れたばかりの情報を披露した。ユナの声を聞いたこの店の女将が、奥から顔を出して口を挟んだ。

「今や薬品業界もナショナル・エイド社の一人勝ちみたいなもんだからねえ。大昔は独占禁止法ってのがあって、どっか一社が一人勝ちして技術や値段が偏らないように、カルテルとか言って世間に出まわる品物の量や値段を調整してたみたいだけどねえ」

女将は恰幅の良い身を揺らしながら、不満げな声を出した。

「スラムにやいまだに被爆の後遺症でガン患者が溢れてるっていうのに。結局きちんとした医療を受けられるのは、統制区域に住んでる連中だけさね。格差は広がる一方だよ」

「母さん。早く支度をしないと、ランチの時間が始まっちゃう」

おしゃべりな女将を諭すように、マスターは準備を始めた。

ユナはこの夫婦の本当の子供ではない。

彼女はうんと小さなころ、コマキ自治区に本当の両親と一緒に暮らしていた。それが十年前に軍からの攻撃を受け、両親と死別してしまったのだ。それ以来、遠縁にあたるこの夫妻の元で暮らしているのだ。

子供のいなかった夫妻は、ユナを本当の子供のように可愛がった。ユナもそれに応えるように、せっせと店の手伝いをした。人見知りせず明るく可愛らしい彼女は、お客の評判も良かった。生活はそれほど裕福ではなかったが、健康で幸せに暮らせることを、ユナは心から感謝していた。

十一時半になり、常連客がぼつぼつと来店し始めた。ユナはオーダーを取ったり、出来上がった料理を運んだりしながら、ある人物が来るのを今か今かと心待ちにしていた。

正午を少し回ったところ、からん、と店の扉を開けて、一人の男性が入って来た。背の高い、三十歳前後の男だった。

「クオンさん！　いらっしやい！」

ユナはひときわ明るい声で出迎えた。クオンと呼ばれた男はわずかに微笑むと、カウンター席の端に腰を下ろした。それが彼の定位置だった。

彼は二年ほど前、ユナがスラム街で柄の悪い連中に絡まれていたところを助けてくれた人物だ。それが縁で、彼はユナの店にちよくちよく来店するようになった。ランチに来ることもあれば、夜に酒を飲みに来ることもあった。

彼の素性はよく知らない。分かっているのはハママツ自治区の中に住んでいるということと、用心棒のような仕事をしているということぐらいだった。精悍な顔立ちだがその表情はいつもどこか陰を湛えており、一見すると話しかけにくい雰囲気を持った男だ。

しかし、ユナはそんな彼に恋をしていた。本当は優しい人だということを知っているからだ。まだ十六歳の彼女からしたら随分と年

上の相手だが、そんなことを気にする彼女ではなかった。

「クオンさん、また薬の値段が上がるんだって。さつき果物屋さんの奥さんから聞いたの」

ユナは水を出しながら、クオンに声を掛けた。一見寡黙そうに見える彼だが、話し掛ければちゃんと応えてくれる。彼女はいつもちよつとした世間話など話題を作っては、積極的に会話しようとしていた。

クオンは頷いた。

「ああ、それ俺も聞いたよ。ナショナル・エイド社もいよいよ独占的になってきたな」

「昔は独占禁止法っていう法律があつたんでしょう？」

難しいことはよく分からないユナであつたが、会話が続けば何でも良い。彼女はついさつき女将が言っていた言葉を口にしてみた。彼は少し感心したような声を漏らした。

「ユナ、難しい言葉を知ってるな。とは言っても、俺もその時代のこととは良く知らないんだけどな」

クオンに褒められたことに嬉しくなつたユナは、更に続けた。

「クオンさん、お仕事柄怪我をすることもあるんじゃない？ お薬や包帯が高くなつたら、ほんと困っちゃうよね」

その言葉に、彼はふっと口元を緩めた。

「そうだな、怪我をしないように気をつけなきゃな」

ふいに向けられた笑顔に、ユナの心臓は高鳴つた。みるみる頬が紅潮していくのが自分で分かる。普段はどこか暗い表情の多いクオンだが、たまに見せる笑顔がとても素敵なのだ。

しばらくもじもじしていたユナだったが、別の客が彼女を呼ぶ声ではっと我に返り、クオンに一礼してその客の元へ飛んでいった。

その後はランチタイムのピーク時間となり、ユナがクオンに話しかける暇はなかった。しかし彼が会計を済ませて出ていくところを目にした彼女は、彼を追い掛けて店を一步出た。まだほんの十メー

トルほど先の彼の背中に、彼女は声を掛けた。

「クオンさん！ 今度はいつ来るの？」

ユナの声に気づいた彼は、ゆっくりと店を振り返った。

「そうだな。今日は仕事が早く上がる予定だからな。また今夜来るよ」

軽く右手を上げて去っていくクオンの広い背中を見つめながら、ユナは飛び上がりたい衝動を抑えるのに必死だった。今日はなんてラッキーデーだろう。彼女は軽い足取りで、仕事に戻っていた。

第3話：一日目（2）「ハママツ自治区へ」

キツカは会社のビルを出た後、シズオカ統制区内にある自宅アパートへと帰宅した。着替えと武器を準備するためだ。スーツにパンプス、丸腰状態では、さすがの彼女でも何かあった時に分が悪いだろう。

彼女は寝室のクローゼットを開けた。中には出勤の際に着るパンツスーツが何組かに加え、今までの作戦で使ったボディスーツや潜入捜査の折に着用した華やかなドレスもあった。一瞬これまで遂行してきた任務のことや、その時に抱いていた自分なりの真摯な想いが胸を過ったが、すぐかき消した。

彼女はたくさんのお衣装の中からベージュのタートルネックの半袖ニットと濃紺のスキニージーンズを選び、すばやく着替えた。ショルダーホルスターに愛銃を挿し、上からショート丈の黒いトレンチコートを羽織った。足元は窮屈なパンプスから、使い込まれたエンジニアブーツへと履き替えた。ボストンバッグには予備の銃弾や組み立て式のライフルを詰め込んだ。そして川島博士から預かったメモリーチップやモリノにもらった携帯端末は、ウエストポーチに大事にしまった。

身支度が済むとキツカは家を出て、統制区内のレンタカー屋に向かった。マスコミにデータを持ち込むとなると、自治区域に行く必要があった。統制区内では、どこでどう握り潰されてしまうかわからないからだ。

ここから一番近い自治区は、ハママツだ。

核が落とされて以降、鉄道は物資運搬のための機関になっており、一般人が移動手段として利用することはできなかった。キツカには

社有車があつたが、そこから足がついてもつまらないので、レンタカーで移動することにしたのだ。

レンタカー屋で渡された申込用紙の氏名欄に、キツカは左手で「山野領子」と書き込んだ。左手での筆記は、右手を義体化したばかりで自由に使えなかった時に習得したものだ。そして山野領子名義の運転免許証を添えて店員に渡した。以前、潜入捜査の時に使った偽造免許証だ。会社から支給されたものなので依然としてここから足がつく可能性はあるが、彼女の本物の免許証を出すよりはいくらかましだろう。

「ご旅行ですか？」

レンタカー屋の店員は、キツカにそう尋ねた。この物騒な世の中、若い女性が一人でレンタカーを借り遠出することに違和感を感じたのかもしれない。

「親戚がナゴヤ統制区にいます」

キツカはあらかじめ用意していた嘘をさらりと言った。こんなところで足止めをくらう訳にはいかない。なおも釈然としない表情で彼女を見つめる店員に対して、彼女はにこりと微笑んで見せた。すると彼は途端に顔を赤くし、それ以上何も追及して来なかった。簡単なものである。

こうして彼女は無事に、若い女性が好んで乗るような当たり障りのないコンパクトカーを借り、ハママツへ向けて出発した。

キツカは国道一号線を快調に飛ばしていた。

かつて非常に交通量の多かったというこの道は、今や閑散としていた。申し訳程度に残っている信号機も、ずっと黄色点滅のままだ。人々は、基本的に自分の住む区域内から出ない。どの区域にも属さず、人の住まなくなってしまった地域では、車はおろか人間の姿を見ることもほとんどなくなってしまったのだ。

旧静岡市内をしばらく行くと、『藤枝市』と書かれた看板に出会う。適当なところで休憩を挟みながら旧島田市も抜けて進んで行く。と、やがて旧掛川市内に入った。この調子なら、日が沈む前にハママツ自治区へ着くことだろう。

旧磐田市に差し掛かったところ、キツカはバックミラーに小さく映る黒い車にふと気づいた。

それ以降、キツカがスピードを上げようとも休憩のために停車しようとも、その車は彼女の車からつかず離れずの距離を保っていた。それで彼女は確信した。

——尾行されている。

まずいな、もう本社側に気づかれたのか。

一体どのタイミングでばれたのか。キツカは記憶を辿った。レンタカー屋では抜き取りなくやったつもりだ。会社から昼過ぎに帰宅したことにしても、彼女の課の特性上早退することもよくあるので、然程不自然でもないはずだ。

だとしたら、研究棟での川島博士との会話から既に盗聴されていたのだろうか。そうなればモリノの身も危ないかもしれない。一瞬、もらった携帯端末でモリノに連絡を取ることを考えた。だが仮に彼がまだ本社側に見つかっていなかったとして、彼女の送った電波によつて足がついてしまう可能性を考え、やめておいた。いずれにしても今しなければいけないことは、尾行を撒くことだ。

キツカは一号線から旧市街地へ続く脇道に入った。無人となった街は、目眩ましにはちょうどいい。多少暴れたって犠牲者も出ない。くねくねと建物の間を縫うように車を走らせると、やがて変電所跡に行き着いた。敵を待ち構えるのに良さそうだ。

キツカは車を止め、武器の入ったボストンバッグを手に、無人の変電所の塀を乗り越えた。

尾行の車がキツカの乗り捨てた車に追いついたのは、その数分後のことだった。黒い車の中から三人の男が出てきて、そのうちの一人がキツカの車の中を確認した。車が既にもぬけの殻であることが分かると、三人は銃を構えながら辺りを警戒するようにきよるきよるした。

たった三人で来るとは、私も舐められたものだな。

キツカは変電所の鉄塔の上、彼らの死角となる場所からその様子を伺っていた。手には手早く組み立てたライフルが握られている。彼女はスコープを覗き、彼らのうちの一人に狙いを定めた。

激しい衝撃と共に発射された弾は、変電所の鉄塔の間を縫って一人の男の左肩口を撃ち抜いた。

彼女は小さく舌打ちした。足場が悪く狙いが安定しにくいことと障害物が多いせい、一撃で仕留め損ねたのだ。撃たれた男はその場に蹲り、それ以外の二人は銃弾がどこから飛んできたか確認しようと必死で辺りを伺っている。

キツカは手早く銃弾を装填し、蹲る男を再度狙撃した。再びライフルのしんがりを当てた右肩に反動の衝撃を受ける。今度は男の頭部に命中したが、二発目の銃撃が残りの二人に彼女の位置を教えることになった。

彼女は鉄塔から飛び降り、ライフルを捨ててコートの下からハンドガンを抜いた。

キツカを追って来た者たちは、さすがに素人ではなかった。

彼らは二手に分かれ、彼女を挟み討ちするようにじわじわと距離を詰めていった。彼女が移動する度に銃弾が発射される。しかし幸いなことに、その多くが乱立する鉄塔に邪魔をされ、彼女には当たらなかった。この場所を選んだ彼女の判断は正しかったと言えるだろうが、弾が当たらないのは彼女も同じことだった。

こうなれば、接近戦に持ち込んで一気に片を着けた方が良さそうだ。

キツカは彼らの死角を選んで鉄塔の間をそろりそろりと抜け、一人の男に接近した。

男が彼女に気づき、構えた銃を発射するより一瞬早く、彼女は勢いをつけた右膝蹴りを男の顔に叩き込んだ。戦闘用に強化された彼女の右脚の膝は、着地と同時にあっさりと彼の顔面にめり込んだ。

態勢を立て直す間もなく、一発の銃弾が彼女の右腕をかすめる。

見ると、もう一人の男が彼女に向かって銃を構えていた。彼女は咄嗟に建物の陰へと飛び込み、二発三発と撃ち込まれる銃弾を避けた。弾がかすめた右の二の腕はコートが焦げ、かすり傷となつて僅かに出血していた。しかし今それを気にしている暇はない。キツカは物陰に隠れながら、徐々に相手が接近してくる気配を感じていた。

チャンスは一度きりだ。彼女は足元に落ちていた石を拾い、彼の視界に入るように投げた。

案の定、彼は転がる石に向かって反射的に発砲した。

彼がそれを判断間違いだと認識した時にはもう手遅れだった。その僅かな隙をついたキツカは、物陰から彼の頭部に狙いを定めて引き金を引いた。銃弾は男の眉間を撃ち抜き、彼が倒れたところに大きな血だまりができた。

絶命した男の手から離れた拳銃が、キツカの足元に転がって来た。その銃は、合衆国軍で採用されている型と同じものだった。

ナショナル・エイド社と合衆国軍のつながりが深いことはキツカも知っていたが、川島博士の実験データを奪い返すために軍が動いているということに、彼女は驚きを隠せなかった。つまりこのデータは、合衆国軍の機密と深く関わっているということだ。博士は「本社からの命令で研究を進めていた」と言っていたが、本社は合衆国軍と共謀して何か良からぬ計画を進めているのかもしれない。

背中を、冷たい汗が伝っていくのを感じた。ひょっとして自分とはんでもないことに巻き込まれているのではないだろうか。自治区域に入る前からこんなことになるうとは、はたして無事にデータをマスコミに持ち込めるのか。にわかに、一抹の不安が過った。

しかしネガティブな思考は任務に悪影響であることを、彼女はこれまでの経験上嫌というほど分かっていた。リスクを認識した上で、それをうまく避けることを考えるべきだ。幸いなことに、ハママツ自治区はもう歩いて行ける距離だ。

キツカはとりあえず、途中で投げ捨てたライフルを拾いに行った。これもまだ必要な時があるかもしれない。組み立てた時と同じように手早くそれを分解し、傍に落ちていたボストンバッグにしまった。彼女がバッグを手に、立ち上がるうとしたその時だった。

銃声と共に、左肩に強烈な衝撃が走った。

一瞬遅れて、燃えるような痛みが来る。

驚いて反射的に振り返ると、膝蹴りで顔を潰された男が、半身を起した状態で彼女に銃口を向けていた。彼女は咄嗟にハンドガンで彼の頭部を撃ち抜き、今度は確実に絶命させた。

キツカは膝蹴りで倒した男の生死をきちんと確認しなかったことを、激しく後悔した。「お前、最近気を抜いてるんじゃないか？」というソウマの言葉が頭をかすめて、更に苦々しい気分になった。彼の言ったことはあながち間違っていないかもしれない。

「くそ……」

左肩の銃創からは、とめどなく血が流れている。銃弾は貫通しているようだが、早く止血しないと致命傷になりかねない。ボストンバッグの中に多少の包帯が入っていたが、動脈をかすめたのか出血は簡単には止まりそうになかった。

お前、怪我の治癒スピードは一般人と同じなんだからな。別れ際に聞いたモリノの声が、聞こえた気がした。

とにかく、自治区内の病院を探そう。

大量の出血で徐々に朦朧とする意識の中、キツカはハママツ自治区の中に足を踏み入れた。

ユナは夕暮れの街を、軽い足取りで店に向かっていた。

夕方の買い出しは酒のつまみになるようなものが多いので、昼の買い出しより荷物が軽い。しかし、この今にも踊り出しそうな足取りは、荷物の軽さのせいではなかった。クオンが夜も店に来る。たったそれだけのことで、世の中の不幸が全て吹き飛んでしまったかのように幸せだった。スラムに程近い薄汚れた街だが、夕焼けに染まって美しく見えた。

「あらミーちゃん、あなたもお散歩？」

足元を顔見知りの黒猫がすり抜けていった。猫は一瞬立ち止まり、にやあと一声返事をする。

「今日はねえ、あたしラッキーデーなの。今日これからまたとびきり良いことがあるんだよ」

ユナは弾んだ声でミーに話し掛けたが、猫は素知らぬ顔ですたすと路地に入って行ってしまった。

「あつ、待ってよぉ！」

彼女は慌てて猫を追いかけ、細い路地に入った。路地裏はゴミ溜めのようになっているところが多いため、普段の彼女だったら決して踏み込んだりしないのだが、今日は異常とも言えるハイテンションがそれを忘れさせた。猫でも誰でも、この幸せを分けてあげたい気持ちでいっぱいだったのだ。

「ミーちゃん？ どこ行っちゃったの？」

刻一刻と沈む夕日に、黒猫の体は路地裏の闇に溶けて見えなくなってしまった。

「もう、いつもすぐいなくなっちゃうんだから。もういいよ」

ユナが踵を返して元の道に戻ろうとした一瞬、視界の端に何か動くものが見えた。さっき一度は見失った黒猫だった。猫は枝分かれた路地の交差点にあたる部分に腰をおろし、また一声にやあと鳴いた。その様子に違和感を覚えた彼女は、猫のいる方へゆっくり歩

いて行った。

すると今まで彼女の死角になっていた路地の角に、何かブーツのようなものが落ちていたのが見えた。猫はまさにその場所を彼女に示しているのだ。

足――？

彼女は恐る恐る近づき、角を覗きこんだ。
するとそこには、人間が倒れていた。

きゃあ、とユナは口の中で悲鳴を上げた。死体ではないかと、一瞬思ったのだ。しかしよく見ると、その人物はげいぜいと荒く呼吸をしていた。右手で左肩口を押さえて蹲るような格好で、苦しそうに小さな呻き声を上げている。

「あ、あの……大丈夫ですか？」

明らかに大丈夫ではなさそうだったが、他に何と声を掛けて良いのか分からなかった。長く束ねた髪や身体の細さから、女性のような。

「肩、怪我してるんですか？」

ユナは女の身体を少し揺り動かすようにして顔を覗き込む。しかしその瞬間、はっと息を飲んだ。今まで陰になっていたよく見えなかったが、辺り一面が血だまりになっているのだ。

「あ、あの、あたしすぐに助けを呼んできます！ だからもう少し頑張つて！」

言うなり、彼女は走り出した。

「ねえ大変！ その路地で女の人が倒れてるの！」

店の扉を開けて開口一番、ユナは叫んだ。

全力で駆け抜けてきたせいで激しく息が上がっていた。店内にはマスターと、既に来店していたクオンの姿があった。あれほど心待ちにしていた彼の姿だったが、今はそれどころではない。

「肩から血をたくさん流して……早く来て！」

ユナはマスターとクオンを連れて、再び女の倒れている路地へと駆けつけた。

その女は先ほどと同じ格好のまま倒れていたが、気のせいかもしれない。呼吸が浅くなっていた。

彼女の傍に膝をついて様子を見たクオンが、マスターを見上げて言った。

「これはまずいな。マスター、救急車を」

「ああ、分かった」

マスターはポケットから携帯端末を取り出し、電話を掛け始めた。クオンは女を軽々と抱え上げ、少し広い場所へと移動させた。そして自分のウエストポーチから布のようなものを取り出すと、それを長く引き裂いた。救急車が到着するまでの応急処置だ。傷は比較的臓に近い場所なので、少しでも早い止血が生死の分かれ目となる。幸い、傷を受けてからそれほど時間は経過していないようだ。

ユナは彼女が倒れていたすぐ傍に置いてあったボストンバッグを持ち上げようとした。しかしそれは、見た目に反してずしりと重かった。

「ねえ、これ何？」

ユナがボストンバッグの中身を覗きこんで声を上げると、クオンが女の上着を脱がせ、彼女が若い女性には似つかわしくないシヨルダーホルスターを装備しているのを見つけると、ほぼ同時だった。

ホルスターには使い込まれたハンドガンが差し込まれており、バッグの中には組み立て式ライフルと銃弾箱が入っていた。

「ちよつと訳ありのお客さんのようだな」

クオンは独り言のように呟き、女の肩に布を巻いて止血をしながら、救急車の到着を待った。

第4話：二日目（1）「不可解な奇襲」

目覚めて真つ先に視界に入ったのは、見知らぬ白い天井だった。

キツカははつきりしない頭で、義体化手術から覚醒した時のことを思い出していた。コールドスリープから解凍された身体が、再び巡り始めた血潮で徐々に感覚を取り戻していくのだ。あの時ほどの不思議な目覚めを、彼女は経験したことがない。ただ冷凍睡眠していたというより、一度死んで生き返ったかのような気分だったのだ。そのままぼんやりと宙を仰いでいると、横からハイトーンの声が聞こえた。

「あ……良かった、気がついたみたい」

声のした方に重たい頭を動かすと、少女の白い顔が目に入った。

「気分はどうですか？ 肩、急いで処置してもらったんですけど…

…」

ショートボブの髪の毛の、くりつとした瞳の丸顔の少女だった。細い身体にワンピースのような形のエプロンを身に着けている。

キツカは状況が飲み込めず、ぱちぱちと瞬きして少女の顔を見つめた。頭はぼんやりしているが、どう考えても見知らぬ顔だった。

「あ、あたし、高^{タカ}由奈^{ムラ}ついていいいます。お姉さん、路地裏で血を流して倒れてたから、あたしびっくりしちゃった。ここは病院で、肩の傷は縫ってもらったよ。お姉さん、あれから丸一日くらい眠ってた」

ユナの言葉にみるみる現実を引き戻されたキツカは、背筋に冷たいものが走るのを感じた。直近自分の身に降りかかった出来事が、まざまざと思い出される。彼女は慌てて、無事な右手でウエストポーチをしていた腰の辺りを探った。

——ない。

「あ、お姉さんのポーチ、横に置いてます。中のものは触ってない

よ」

ユナが促した方へ視線を向けると、確かにキツカが身に着けていたウエストPOCHがきちんと置かれていた。右手で手繰って、中を確認する。メモリーチップと携帯端末は入れた時のままだった。彼女はほっと安堵して、小さく息をついた。

「お水、飲みますか？」

少女の華奢な腕がベッドを操作し、キツカは身を起こした。ユナが差し出した水の入った紙コップを、右手で受け取る。

「ありがとう」

久々に発した声は少し擦れていたが、それを聞いたユナははにかんだように笑みをこぼした。可愛い子だ。

キツカは少し辺りを見回し、それから自分の身体を確認した。負傷した左肩口と右の二の腕には丁寧に包帯が巻かれている。そして服は真新しいタンクトップに変わっていた。きつと誰かが血で汚れた服を着替えさせてくれたのだろう。麻酔の切れかけた傷口がじわじわと痛んだが、我慢できないほどではない。

キツカはユナに尋ねた。

「私はハママツ自治区を目指して来たんだけど……ここはもう自治区の中なのか？」

「うん、自治区内の病院だよ」

「良かった、ここはハママツなんだな……」

ユナは相槌を打ちながらも、キツカの顔をまじまじと見つめていた。キツカがその視線に気づいて軽く首を傾げると、ユナは何故か少し恥ずかしそうに視線を逸らした。

ここに辿り着く直前の出来事を思い出せば、胸を撫で下ろさずにはいられなかった。キツカは顔を持ち上げて、ユナに向き直った。

「私は橘菊花。ユナさん、助けてくれてありがとう」

キツカは僅かに笑みを作り、座ったままの状態で少し首をもたげた。ふいに名前を呼ばれ、ユナはほっと火がついたように赤面した。「いいの、全然！ あたしは人を呼びに行っただけで、ほんとに大

したことなくしてないんだから！」

少女の慌てた様子に、キツカは頬を緩めた。

「あつ……そう言えば……！」

突然、ユナが思い出したように声を上げた。そしてキツカの耳に顔を寄せ、内緒話するように小声で言った。

「キツカさんの荷物、うちで預かってます」

ユナに案内された先は、古めかしい喫茶店のような店だった。

白いタイルの外壁は煤けたような色に変色していた。通りに面した窓もくぐもっている。小さな手書きの立て看板が出ているだけの小さな店だ。夕方の四時だった。店のドアには『CLOSE』の札が掛っている。

「あらあ！　こりゃえらい別嬪さんを連れて来たねえ」

店の中に入るなり、女将とおぼしき恰幅の良い中年女性が声を上げた。

中は外観と比べればまだ新しかったが、全体的に古びた雰囲気だった。しかし不思議と暗さはなく、包み込むような温かい空気に満ちていた。コーヒー豆の良い香りがする。

店内にはその女性とマスターらしき中年男性、それとカウンター席の端に一人の青年が座っていた。キツカはその青年が、ここへ来るまでの道すがらユナから聞いた、昨日自分を介抱してくれた人物だろうと思った。彼女は店の中の三人に向かって、軽く頭を下げた。

「もう大丈夫なのかい？」

マスターがキツカに向かって声を掛けた。キツカは軽く微笑みを作った。

「ええ、お陰さまで。本当にありがとうございました」

「とりあえずキツカさん、座って座って。立ち話もなんでしょう？」

ユナに促され、キツカは青年の隣に腰を下ろした。ユナはぱたぱたとカウンターの向こう側へ入って行った。

「君の荷物、預かってるよ」

隣の男がいきなりそう声を掛けてきた。そしてキツカにシヨルダールホルスターとボストンバッグを手渡す。彼は当然中身を知っているはずだが、特に訝しむような様子はなかった。彼女もそれに調子を合わせる。

「ユナさんに聞きました、ありがとうございます。あと、昨日助けてくれたことも」

男はそんなこと何でもないと言うように、小さく肩をすくめて見せた。そこで一旦彼との会話は途切れ、ユナがコーヒーを運んでくるまで沈黙が続いた。キツカはコーヒーを一口飲む。香ばしい香りが鼻腔をすり抜けた。

沈黙を破ったのは、再び出し抜けに口を開いた彼の方だった。

「君は……何者なんだ？」

「ちよつとクオンさん！ いきなり失礼だよ」

ユナに叱られ、クオンと呼ばれた男は小さくすまん、と言った。

「俺はクオン。この街で用心棒だとか用聞きだとかの仕事をしている。まあ、なんでも屋みたいなもんだな。仕事柄武器を使うこともあるが、危ない橋は渡っていないつもりなんで安心してほしい。つまり、そういうことを聞きたいんだ」

やはり、キツカが銃器を所持していることに対して懸念があるようだ。

キツカは一瞬躊躇った。下手に真実を話して、この善良な無関係の人たちを巻き添えにしてしまうことだけは避けたかった。しかしデータを信用できる場所に持ち込むために、情報をもらう必要もある。とりあえず簡単に、タチバナです、と名乗った。

「訳あって詳しい事情は話せないんですが……私はあるデータをマスコミに持ち込んで世間に公表するために、シズオ力統制区から来ました。その途中でデータを狙う追手に襲われて。それはどうにか倒したんですが、私も傷を受けてしまって。動けなくなっているところを、あなた方に助けられた」

「……なるほど」

クオンは全く納得していないような表情でそう言ったが、特にそれ以上追及することもなかった。誰だって面倒には巻き込まれたくないだろう。

「この街に新聞社かテレビ局はありませんか？ 場所を教えていただくだけで結構です」

キツカはカウンター越しに、マスターと女将に問い掛けた。場所だけ聞いて、早々に店を立ち去るつもりだった。またいつ追手がかかるか分からないからだ。

壮年の夫婦は少し困ったように顔を見合わせていたが、やがてマスターが口を開いた。

「新聞社なら、あるにはあるが……報道規制が厳しくてね、正面からじゃとてもじゃないけど入れてもらえないよ」

「毎日來てる新聞もね、全部内容を政府に規制されてるんだよ。向こうさんにとって都合のいい情報しか、世間に流れないようになってるのさ」

夫の後に妻が言葉を繋いだ。キツカは食い下がる。

「雑誌や本の出版社でもいいんです」

「そういつとも全部同じさ。出版系やテレビも全部向こうさんに仕切られてるんだよ」

「ここは自治区なのにな？」

驚いたようなキツカの言葉に、夫妻の表情は曇った。そこへユナがもう慣れっこといった調子で口を挟む。

「インターネットの制限も激しいしね。なんだかんだで、あたしたちは管理されてるんだよ。『自治』なんて名ばかり」

「そう……」

明るかった店内が、一瞬しんとした。自分の発言でそのような空気になってしまったことに対して、キツカは若干の居辛さを感じた。ともあれ、データを公表できそうな先を見つけることが当面の課題のようだ。

「この街の状況はよく分かりました。自分でなんとか探してみます。いろいろありがとうございました、本当に助かりました」

キツカは席を立ち、店を出ようとした。すると女将が慌ててそれを制した。

「もう行っちゃうのかい？ もう少し休んで行きなよ」

「そうだよ！ キツカさん、お腹空いてるでしょ？ うちのBLTサンドは絶品だよ。ぜひ食べてって」

ユナがそう言いながら、キツカの目の前にサンドイッチの載った皿を置いた。

「酷い怪我して、大変だったんだろ？ たんと食べておくれよ」

女将が先ほどのことなど何でもなかったかのように、屈託のない表情で言う。

キツカは彼女らの勢いに押され、再び席に着いた。そして勧められるままにサンドイッチを一口齧る。

さつくりとしたトーストの歯ごたえに続いて、レタスとトマトの瑞々しさが口の中に広がった。ずっと緊張状態が続いていたため意識していなかったが、食べ物をお口にした途端に胃袋が急激に空腹を訴え出すのが分かった。

キツカは皿に盛られた八切れをあつという間に口に運び、後から追加で出された八切れもすぐさま食べ尽くした。女将が手早く皿に盛ったサラダも、彼女はぺろりと平らげた。サイドに出されたポタージュスープも、彼女はふうふうと冷ましながらあつという間に飲み干した。

「あの、ホットケーキも焼いたけど」

「いただきます」

続けて出された二枚重ねのホットケーキに、たつぷりとメープルシロップを掛ける。それも一瞬で皿の上から消えた。

「……ごちそうさまでした」

キツカはきつちりと合唱し、真面目な口調でそう言った。それまで彼女の見事な食事風景に茫然と見入っていた一同は、その一言に

全員同時に吹き出した。

「すっごあい！　こんなにもりもり食べる女の人初めて見た！」

「そんなに食べてもらえると、作った甲斐があっただってもんさね」

「気持ちのいい食べっぷりだなあ」

口々に賞賛する一同に、キツ力はきよんとした。人より食欲旺盛である自覚はあったが、ここまでの反応を呼ぶとは思ってもしなかったのだ。一同の様子に目を細めていたクオンも、軽く肩をすくめて微笑んで見せた。

キツ力は自分がこのような和やかな雰囲気の人々に囲まれていることに、不思議な気持ちになっていた。

右腕と右脚を義体化して以降、平穏とは無縁の生活を送って来た。法に反する任務や倫理に悖る行為を余儀なくされ、心を殺して与えられた役目を淡々と正確に果たすことこそが自分の存在価値を証明するただ一つの方法だと自分に言い聞かせた。何しろ自分で選び取った道だ。厳しい環境に身を置き続けた結果、今では人の命を奪うことすら何とも思わなくなってしまった。

しかしこうして温かい人の輪に囲まれていると、自分もかつて無条件に手にしていた温かさを思い出さずにはいらなかった。五年前に突然壊れてしまった彼女の居場所。失われてしまった大切な家族。もう二度と戻らない、愛すべき平凡な日々。殺したはずの心が、きゅっと締め付けられるように苦しくなる。

キツ力は慌てて、大切な任務のことを思い出した。逃げてはいけない。忘れてはいけない。川島博士と、モリノと約束したのだから。「本当に、何から何までありがとうございました。ごはん、とても美味しかった。でももう、私は行かなくては。さっき申し上げたように、私は追われている身です。あなた方にまで危険が及んではいけない。お世話になったことは忘れません」

その気持ちは本当だった。しかしのんびりしている暇はない。戦

士に休息はないのだ。

席を立つキツカに、ユナが名残惜しそうにする。

「お仕事が終わったなら、またお店に寄ってね。絶対だよ」

「分かった、約束するよ」

早々に役目を果たし、またこの店でコーヒーを飲もう。それくらいの平穩は許されても良いはずだ。

キツカはホルスターを装備した上からコートを羽織り、ライフルの入ったボストンバッグを持ち上げた。お別れの時間だ。彼女は最後にもう一度頭を下げ、店の扉のノブに手を掛けた。

しかし、その時。

ぱりん、とガラスの割れる音と共に、店内に煙が充満した。

煙の中から、ユナの小さな悲鳴やマスターの「火事か？」という声が聞こえる。

キツカは瞬間的に身を緊張させた。もちろんこれは火事ではない。煙が目に入った瞬間に刺激が走り、彼女は思わず目をつぶった。店内に煙幕弾が投げ込まれたのだ。間違いなく、彼女を追ってきた刺客の仕業だろう。

一人であればすぐに扉を開けて外へ逃げ出すこともできる。しかし店内にはつい今の今まで世話になっていた人々がいるのだ。それを放って一人で逃げる訳にはいかない。ぼやけた視界の向こうから、彼らの悲鳴が聞こえる。キツカはつくづく自分の甘さに腹が立った。やはり早々に立ち去るべきだったのだ。

彼女はとりあえず店の入り口の扉を開け放ち、身を低くした。幸いこの空間の端にいたため、それほど煙幕ガスの影響を受けてはいなかった。

そのまま匍匐前進のまま店の中央へと進む。そして意識を集中させ、敵の攻撃を警戒する。

店内には四名の足音や声の他に、明らかに異質なものの存在があ

った。具体的に足音や話し声がする訳ではない。空気を伝ってくる言葉では説明できない何か。殺気、とでも言えばいいのだろうか。ひたひたと迫ってくるような、全身を刺すようなそれを、キツカは肌で感じ取っていた。

およそ、三人。

キツカは来たるべき攻撃に身を構えた。

ひゅつ、とごくわずかに空気を裂くような音が聞こえたその瞬間、キツカは身を翻して仰向けになり、反射的に右手で何かを掴んだ。それは人間の腕で、その手にはサバイバルナイフが握られていた。刃の切っ先は、彼女の顔面まであとほんの数センチのところ動きを止めている。その向こう側に、この街に入る直前に彼女を襲った男たちと同じ格好をした黒ずくめの男の姿が見えた。

キツカは左手でナイフをもぎ取り、右手で相手の腕を握り潰した。ばきばきという骨の折れる音がし、男は声にならない声を上げる。痛みに悶えて彼女の身体の上にどさりと落ちてきた男の身体を、彼女は思い切り右脚で蹴り上げた。只でさえ義体化し人外の破壊力を持つ彼女の右膝は、その男の股間にクリーンヒットした。多分もう使い物にならないだろう。

彼女は力を失くした男の首を抱きしめるような格好をしたかと思うと、そのまま力を込めて頸椎を砕いた。胸元にごきりという鈍い音が響く。彼女は男の身体を払いのけ、身を起こす。扉を開け放ったおかげか、徐々にガスは薄れてきていた。

薄くなった煙を切り裂いて、二番手の男がキツカに向かって突進してくるのが見えた。彼女はこれも難なくかわし、大振りのできた大きな隙について懷に飛び込む。そして相手の勢いを利用して鋭く背負い投げを決めた。

背負い投げ程度であれば、義体の力を借りずとも可能だ。力任せに拳を振るってくるようなタイプは振りが大きく隙がしやすい。柔道や合気道などを、彼女は基礎的に習得していた。

脳震盪を起こして気絶したその大柄な男の腕を掴むと、キツカはその身体を右手一本で持ち上げて、少し離れたところからこちらに銃を向け今にも引き金を引こうとしていた最後の男に向かって、放り投げた。

銃口から放たれた銃弾は、宙を舞う男の心臓をやすやすと貫く。そしてそれがキツカのもとに届く瞬間、彼女は右足首をぐつとしならせ、その反動で高く舞い上がった。

常人では考えられない滞空時間で天井すれすれに決めたムーンサルトは美しい弧を描き、発砲した男のすぐ手前に着地した。投げられた仲間の身体で目隠しとなって、男には彼女が突然目の前に降ってきたように見えただろう。

彼女はすぐさま、今度は生身の左脚をクッションに勢いをつけ、右脚で男の頭部を蹴り抜く。男の体は圧倒的な力で跳ね飛ばされ、店の窓を突き破って錐揉みしながら店外へ吹っ飛んで行った。インパクトの瞬間に鈍い音がしたので、恐らく頸椎が折れたのだろう。彼女の足元に転がっている拳銃は、やはり昨日襲ってきた男と同じ型のものだった。合衆国軍には、三人一組で行動しろというルールでもあるのだろうか。

すっかり煙の消えた店内に、再び静けさが戻る。

気づくと店のほぼ中央に立つキツカを、カウンターの奥にへばりつくように身を潜めていた夫妻とユナが怯えたような目で見つめていた。彼女の常人ならぬ力を見れば、無理からぬことだ。恐らく彼らの目には化け物のように映っただろう。

クオンはカウンターの前辺りで、彼らを守るように立っていた。彼の目には怯えた色はなかったが、しかしやはり茫然と彼女を見つめているのだった。

つい先ほどまで温かさに包まれてほっとしていた心が、今度は驚くほど底冷えするような闇に飲まれていく。

もう、立ち去った方がいい。

キツカは無言のまま、そつとカウンターの何枚かの紙幣を置いた。店を壊してしまったせめてもの償いだ。そして店の入り口へと歩み置いていたボストンバッグを持ち上げた。彼女は最後にもう一度だけ頭を下げ、静かに店を後にした。

外へ出ると、既に夕暮れ時となっていた。見事な夕焼け空も、今は何の感銘もキツカの心に与えない。それどころか、抑えられない不安が彼女の中にもくもくと湧き出していた。

何故、彼女があのお店にいたことが分かったのだろうか？

それは無視できない問題だった。

念のため持ち物を検してみたが、発信器らしきものはどこにも見当たらない。気づかぬうちに尾行されていたのだろうか。もし彼女の居場所が彼らにばれているのだとしたら、片時も気を抜けないということになる。次の刺客がすぐ来ないとも限らない。恐らくゆっくり眠る時間もないだろう。

一刻も早く、川島博士から預かったデータを公表しなくてはならない。

第5話：二日目（2）「邂逅」

ユナは、キツカが立ち去った店内を茫然と見つめていた。

突然襲ってきた男たちの身体はまだ店内に転がっている。クオンが一人ひとりの脈を確かめ、その度に小さく首を振った。恐らく、死んでいるということなのだろう。

目の前で繰り広げられたのは、夢ではないかと疑うほど信じがたい光景だった。つい先ほどまでこのカウンターに座ってうまそうにサンドイッチやらホットケーキやらを食べていた細身の女が、軽々と宙を舞いあつという間に三人の大男を倒したのだ。その動きは明らかに普通の人間のものとは一線を画していた。恐怖よりも、ただ信じられないという気持ちが勝っていた。

やがてマスターが自警団に電話を掛け始めた。この街に警察はない。警察をはじめとする各種行政機関は全て統制区に所属しているため、自治区域ではそういったことも全て自分たちの手で行わなくてはいけないのだ。

ユナはカウンターに置かれた数枚の紙幣に目を落とす。最後に頭を下げたキツカの酷く哀しそうな瞳を思い出し、彼女はぐつと心臓が締め付けられた。あの時キツカは、一体どんな気持ちでお金を置いていったのだろう。

店の損傷具合や男たちが持っていた武器を調べていたクオンが、ふと思い立ったように立ち上がった。

「すいませんマスター、少し確認したいことがあるので、ちょっと出てきます」

彼は短くそう言うと、店の扉を開けて出て行ってしまった。

キツカを追いかけるのだろうか。

ユナは思わず、クオンにつられて外へ飛び出した。後ろから女将が彼女を呼ぶ声が聞こえたが、構わず彼の後を追って走り出す。何故かは分からないが、キツカとあんな別れ方のまま二度と会えなく

なってしまったら、とてつもなく後悔するような気がしたのだ。

■

キツカは新たな敵の襲撃を警戒しながら、当所もなくハママツ自治区内を歩いていた。

途中、自警団と思しき一団が彼女の歩いてきた方へ走って行くのとすれ違った。恐らく、あの店へ向かうところなのだろう。また、心がちくりと音を立てた。

「待ってくれ！」

突然、後ろから声を掛けられた。

思わず立ち止まって振り向くと、クオンが立っていた。走って来たのか、僅かに呼吸が上がっている。キツカは訳が分からなかった。あれだけの光景を目にして、彼女を追ってくる者がいようとは。

「君に聞きたいことがあるんだ」

クオンはゆっくりとキツカに歩み寄った。

「君の右腕……それに右脚もかな」

彼は彼女のボストンバッグを提げる右腕と、腰からすらりと伸びた右脚に視線を移し、最後に再び彼女の瞳を見た。

「義体、じゃないか？」

キツカは、一瞬自分の耳を疑った。今確かに、この男の口から『義体』という言葉が発せられた。

義体化技術のことは、ナショナル・エイド社 特別情報部第三課における機密事項だ。世間は勿論のこと、社内でもその存在を知る人間は数少ない。それが何故、自治区域に住むこの男の口から出るのだ？ 表情がひどく強張っているのが、自分でも分かった。驚きのあまり、言葉が出なかった。

「教えてくれ、タチバナさん。この義体化手術はどこで……いや、

誰から受けた？」

クオンが彼女の両肩に手を置き、まっすぐに目を合わせて更に問い掛ける。左肩の傷口を刺激しないように、気を遣っているのが分かった。

「……言えない」

喉から声を振り絞るように、ようやくそれだけぱつりと言った。クオンは気を悪くした様子もなく、落ち着いた声で言う。

「じゃあ質問を変える。君は『川島宗吾』という医者を知っているか？」

キツカは軽く目を見開いた。カワシマ・ソウゴ。彼女にメモリーチップを託した、川島博士のフルネームだった。

クオンは彼女の反応を肯定と受け取ったのか、更に続ける。

「彼は今、ナシヨナル・エイド社にいと聞いた。君は、ナシヨナル・エイド社の人間か？」

彼女はその質問にも返答することができなかった。

目の前のこの男は、一体誰なのだ？ 何故、川島博士の名を知っている？ 頭の中で疑問符がぐるぐると渦を描いた。

「教えてくれ、タチバナさん」

クオンの瞳に、縋るような、切実な色が過った。

「あなたは……一体……？」

彼女の問い掛けに彼は手を離し、来ていた服の右袖を捲り上げる。すると肘より少し上の辺りに、僅かではあるが手術痕のようなものが見えた。

クドウ・ケイイチ

「俺の本当の名前は、久遠慧一。元自衛隊陸軍の三尉だ。九年前、コマキ自治区で川島先生から義体化手術を受けた」

キツカは信じられない気持ちで彼——クドウ元三等陸尉——を見つめた。九年前。すなわち彼女が義体化するより四年も前、川島博士がナシヨナル・エイド社に来るよりも前に、義体化手術を受けたということだ。

「クオンさん、一体どういうこと？」

ふいに彼の立つ後ろから、ハイトーンの声が掛けられた。クオンを追ってきたユナだった。今の今まで、何か切迫した雰囲気の二人のやりとりに、声を掛けるタイミングを掴めないで様子を伺っていたのだ。

「ユナ……？」

「ギタイ、つて、何？」

ユナの顔が、見る間に蒼ざめていくのが分かる。

クオンはキツカとユナの顔を交互に見、そして小さく溜め息をついた。

「……事情を説明するから、俺の家に行こうか」

彼の家は、店からそう遠くないところにある、低所得者層が多く住む古いアパートだった。

薄い木製の扉を開くと、そこは明らかに堅気の者の部屋ではない異質な雰囲気になっていた。ワンルームの部屋の壁いっぱい設置された棚には、数々の武器が整然と並べられている。ひとつしかない窓の近くには小型のパラポラアンテナが置かれ、傍受した電波の記録が起動しつ放しのパソコンのモニターに映し出されていた。まるでテロリストの部屋だ。ユナはその部屋の様子だけでもかなりのシヨックを受けたようだった。

「さて、何から話そうか」

彼は部屋の中でも最も場所を取っている簡易ベッドに二人を座らせ、その目の前に置かれた何かの機材のような箱の上に薄いコーヒーの入ったマグカップを二つ置いた。彼自身は二人の反対側、やはり何かの機材の上に腰掛け、脚を組んだ。

「元自衛隊、という話だけど」

キツカが促す。

「ああ、そうだな。まずそこから話を始めるのがいいんだろうね」

彼は十年前の、反合衆国軍ゲリラに対するコマキ自治区攻撃の話

を静かに語り始めた。彼の所属部隊が最前線に配置されたこと。多くの仲間を失ったこと。

多数の一般市民の死傷者を出した内戦は、キツカの記憶にも残っていた。一方のユナは、はっとした表情をしていた。彼女自身も、その内戦の被害者なのだ。

「あれは作戦と言えるような代物じゃなかったな。とにかく破壊しまくる。ゲリラ軍を燦り出すための、ローラー作戦だ。敵味方問わず、日ごとに被害者の数が膨れ上がった。前線にいる奴らの精神状態にもすぐに限界が来た。そんなある日、俺は運悪く足元に埋められた地雷を踏んだ。そして右腕と両脚を失った」

彼は左手で、右腕の生身と義手の継ぎ目の部分をさすった。

「それでもって、目覚めたら『川島病院』にいた。気づいた時には、俺の右腕と両脚は義体になっちゃったんだ。とは言っても、君みたいに凄腕のあるものじゃない。生身の身体と同じ機能しか持たない義体だ」

川島医師が内戦で負傷し手足を失った者を敵味方問わず収容し、救っていたこと。医師の息子がそれ以前に内戦で命を落としていること。看護師として働いていた医師の娘、ハルカのこと。一家の母親がナショナル・エイド社にいたこと。彼はひとつずつ記憶を確かめるように、ゆっくりと話を続けた。

「……ハルカと俺は、恋人同士だった。俺はその後『川島病院』で三年間、看護師として彼女と一緒に働いた。思えばあの三年間が俺にとって一番平和だったかもしれないな。でも、それは唐突に終わった」

彼は眉根を寄せながら、運命の夜の話を話した。夜中に合衆国軍と思しき部隊が病院に侵入し、患者やスタッフを次々殺していたこと。川島医師の、彼らの狙いが自分であることを伺わせるような発言。そして、彼とハルカはコールドスリープ装置で眠りに就いたこと。

「俺はちょうどその一年後、コールドスリープから目覚めた。川島

先生は装置の解除に来说っていたが、結局無理だったようて、
タイマーがセツトされていた一年後に目が覚めたんだ」

「……ハルカさんは？ ハルカさんも、一緒だったんでしょう？」
ユナが恐る恐る口を開く。ハルカの話が出た辺りから、彼女は
つと俯きかけていた。

彼女の問いを受けて、彼の瞳に何とも言い難い哀しみの色が浮か
ぶ。

「ハルカは、目覚めなかった」

彼は膝の上で握り合わせた両手に視線を落とし、静かに息を吐い
た。こつこつと、時計の秒針が時を刻む音が部屋に響いていた。

「理由はよく分からない。タイマーは正常に動いてたし、冷却装置
も問題なかった。でもハルカは目覚めなかった。最初は装置の覚醒
機能の障害かと思つて機械を調べたが、何の異常もなかった。機械
のせいじゃないとしたら、ハルカ自身の問題だろうと思う。彼女自
身に何か問題があつて、覚醒機能が作動しなかったんだ」

彼は一度そこで一息ついて、小さく首を横に振つた。しばらく沈
黙を続けた後、彼は再び口を開いた。

「それから俺は、川島先生を探した。病院が合衆国軍の襲撃に遭つ
た理由が知れたかつたからだ。先生は明らかに何かを隠していたと
思う。——それにハルカを目覚めさせることができるのは、きっと
先生だけだ」

それまでずっと黙つて話を聞いていたキツカが、口をはさんだ。

「それで、川島博士がナシヨナル・エイド社に在るといふことを突
き止めた」

「そう。コマキはまだ不安定だったからな、ハママツに越してきた
んだ。俺は名前と元自衛隊員という経歴を捨て、ここでもなんでも屋
をしながら、情報を集めた。でも、統制区域にはなかなか入ること
ができない。先生がシミズに在るつていふ情報は入手できても、こ
こからの距離以上に統制区域への壁が高かつた。それで悶々として
いるときに、タチバナさん、君が現れた。俺は先生があのか社で、

強化義体の研究開発をしているという情報を掴んでいた。それです
っきの君の動きを見て、ぴんと来た」

彼がじつとキツカを見つめる。先ほど道で呼び止められた時と同じ、
縋るような色が彼の瞳に浮かんでいた。

「改めて尋ねるよ。タチバナさん、君は何者なんだ？」

キツカは観念したように小さく息をつき、ぽつりぽつりと話し始めた。

「私は、もともとシズオカ統制区に家族で暮らしていた。一般市民
だった。それが五年前にシズオカで起きたテロに巻き込まれて、私
は一回死んだ。心臓を撃ち抜かれたんだ。でも、目覚めたらナシヨ
ナル・エイド社の施設にいた。川島博士の手で、人工心臓を移植さ
れていた」

人工心臓、というフレーズに、彼が一瞬反応した。

「だから恩を返すために、右腕と右脚を戦闘用義体に換えた。以降、
ナシヨナル・エイド社に入社して、特殊任務をこなす日々を送って
いた」

特殊任務の違法性については、敢えて触れなかった。言う必要も
ないことだし、話の本筋からしたら蛇足だと思ったからだ。

「そして昨日の午前中、川島博士から呼び出しを受けた。実験に関
するデータを世間に公表してほしいと、しかしそれは会社を裏切る
行為だと言った。博士は会社の言うなりに研究を続けてきたことを、
酷く後悔している様子だった。私の恩人は博士であって、会社じゃ
ない。だから私は博士の申し出を受けた」

「なるほどね」

彼は今度こそ、納得した様子で頷いた。キツカは少し視線を落と
した。

「そして昨日と今日の二度、襲撃を受けた。あれは……合衆国軍兵
だった。『川島病院』を襲った連中も合衆国軍だと言うなら、何か
そこにつながりがあるような気がする」

彼は顎に手をやり、考え込むような仕草をした。いずれにしても、

川島医師本人の口から事情を聞かないことには何も解決しないことばかりだ。少しの間があり、彼が再び口を開く。

「それで、託されたデータはどんなデータなんだ？　中は見た？」

キツカは首を横に振った。

「いや……中身は知らない方が良いと、博士に言われて」

彼は首をひねる。

「どんな内容が知らなきゃ、どう公表したら良いかも分からない気がするけどな。そのデータ、今持ってる？」

キツカはウエストポーチからメモリーチップを取り出し、彼に手渡した。彼は手慣れた様子でハードディスクにそれを挿し込み、読み込みを開始する。

「……何だこれ、何重も暗号化されてるな。すぐには見られなさそうだ」

「そんな……」

キツカは軽く途方に暮れた。データを持ち込む先も見つかっていない上に、仮に見つかったとしても読み込めないデータでは意味がない。彼女自身に暗号を解除する技術、もしくは時間的余裕があるかどうか微妙なところだ。

そんな彼女の様子を見ていた彼は、少し考えた後で口を開いた。

「俺の知り合いに、ハッキングの得意な奴がいる。そいつに頼めば復号化してくれると思う。うまくすれば、そのままネット上に公表することもできるだろう。ネット上の情報規制は厳しいが、そいつにかかれば不可能じゃないはずだ」

その言葉に、キツカは顔を上げる。

「その代わり、俺を川島先生に会わせて欲しい。それが交換条件だ」
彼女は一瞬躊躇ったが、すぐに頷いた。迷っている時間はなさそうだ。

「分かった。あなたを川島博士に会わせると約束する。データの方は、任せた」

「契約成立だな」

彼は右手を彼女に差し出す。彼女も、それを右手で握り返す。義手同士の握手だったが、お互いの固い意思を握り合った。

「私のことは、キツ力でいい。あなたのことは、何と呼べばいい？」

彼は肩をすくめた。そして何だかひどくショックを受けた様子のユナを見やった。

「クオン、でいいよ。『クドウ・ケイイチ』はハル力と一緒に眠ってるから」

「分かった。よろしく、クオン」

キツ力は唇の端をきゅっと上げ、笑みの形を作った。これで一番大きな問題は解決したものと思って良いだろうか。しかしまた、新たに任務が増えてしまった。でも一人でデータの公表方法を悩んでいた時に比べたら、随分と心は軽くなった気がした。

第6話：二日目（3）「交錯する夜」

薄暗い路地を抜けた先に、一軒の店がある。クオンは慣れた手つきで木の扉を押し開けた。

その扉の向こうは、一見普通のダーツバーだった。

クオンは店内にいた何人かに軽く挨拶をし、するりと店の奥へ進んで行く。彼はたまにここで用心棒をする。スラムに近いこの店では、しばしば揉め事が起こるからだ。間接照明のみの店内はいつもほの暗く、クオンは店の客の顔を詳しく知らなかった。彼らもまた、クオンの顔をよく知らないだろう。来る度にいつも同じ数名が店内にいると思っていたが、ひょっとしたら別人かも知れない。いずれにしても店の中に誰がいるかなどということは、彼にとつてはあまり関係のないことだった。

クオンはカウンターの後ろ側にある『STUFF ONLY』と書かれた扉の中へ入っていった。その中は、これまた一見普通の従業員スペースだった。部屋の手前には従業員の勤務時間を管理するためのタイムレコーダーや電話機があり、奥には縦型ロッカーが並べられている。壁際に設置されたスチールラックにはいろいろな備品が置かれていた。

クオンはラックの横に積み上げられていた二段の木箱を手前にどかした。その床に敷いてあった小さなマットをめくると、床下貯蔵庫の蓋のようなものが出てくる。その蓋を持ち上げると、下へ降りる階段が現れた。

彼はその狭く急な階段を用心深く降りた。そして階段の突き当たりにある鉄の扉を、ある一定のリズムでノックした。ややあって内側から鍵が開く音がし、重い扉が開けられた。

「なんだ、クオンか」

中から現れたのは、ボサボサの髪を後ろで乱雑に束ねた、眼鏡に無精髭の男だった。クオンは肩をすくめる。

「なんだとはご挨拶だな、ミスコシ。仕事を持ってきてやったぞ」

ミスコシと呼ばれた男は、面倒臭そうに首をこきこきと鳴らす。

「持ってきてやったってな……こちらら暇じゃねえんだぞ。恩着せがましく言つなら、たまには女ぐらい連れて来いよ」

そう言いながらもミスコシはクオンを部屋の中へ招き入れ、重い扉を再び施錠した。その狭い地下室の中は、三つのモニターが所狭しと並べられ、何台あるか分からないハードディスクが絶えず激しい作動音を上げていた。

「その、女からの依頼だよ」

そう言つて、クオンはキツカから預かったメモリーチップをミスコシに差し出した。

「じゃあその女を連れて来いよ。こんなチップじゃ色気の欠片もねえだろうがよ。まったく、気の利かねえ男だな」

相変わらぬ彼の口調に、クオンは苦笑した。ミスコシはメモリーチップを検分する。

「で、このデータは一体何なんだ？」

クオンは真顔に戻り、少し低い声で言った。

「ナショナル・エイド社と合衆国軍に關係するデータだ。例の、シズ支社で行われている研究の、実験データらしい」

ミスコシが目を見開く。

「マジかよ……本物だったらとんでもねえけどよ」

「本物だよ、間違いなく」

ミスコシはクオンの顔を見る。クオンが嘘を言うような人物でないことは、彼も知っているはずだ。ミスコシは口元に不敵な笑みを浮かべた。

「その依頼人の女、どんな素性だ」

「ナショナル・エイド社の特殊作業員で、例の川島博士からそのデータを託されたらしい。世間に公表しろ、と」

「マジかよ……」

ミスコシは少し考えるような仕草をした。しかしその目に楽しげ

な光が灯っていることを、クオンは見逃さない。それを煽るように、クオンは更に追い討ちを掛ける。

「依頼人の彼女には、合衆国軍の追手が掛っている。やばいやマであることは間違いないな」

「そりゃヤベエ。ヤベエかもしれねえが……このデータの中身には興味があるな」

メモリーチップを指先で弄るミスコシに、クオンは小さく笑みを作る。

「引き受けてくれるか？」

ミスコシはにっとう歯を見せる。

「高くつくぜ」

「臨むところだ」

クオンが頷くのを見届けると、ミスコシは早速メモリーチップをハードディスクに挿し込んだ。機械は小さく呻り、モニターに数列が現れる。

ミスコシは軽く眉根を寄せる。

「なんだこれ、見たこともねえ暗号だな」

「解読できるか？」

クオンの問い掛けにミスコシは小さく頷き、再びにやりと笑みを浮かべた。

「俺を誰だと思ってんだ」

「頼もしいな」

クオンが今まで入手してきた情報は、ほとんどミスコシの協力によるものだった。彼の腕は本物だ。

「お前も手伝えよ」

ミスコシに促され、クオンは空いているモニターの前に座った。

そして、ふと思いついたように口を開く。

「そうだ、その依頼人の彼女な、すごい美人だから今度会わせてやるよ。お前の好みとは違うかもしれないがな」

ミスコシはははっと笑い声を上げ、期待してるぜ、と軽い口調で

言った。

■

キツカは国道一号線を東へ上っていた。

日はとうに落ち、ところどころに灯った街灯と黄色点滅信号のみが道の続いていることを思い出させていた。普段街中に住んでいると気づかないが、人がいなくなった夜の街は本当に暗い。車のヘッドライトが照らす範囲の外側は、完全な暗闇だった。車内のデジタル時計は午後九時十三分を示している。

キツカがハママツ自治区を出発したのは、午後七時半過ぎだった。当初、彼女もクオンと一緒に情報屋のハッカーのところへ行くつもりだった。しかしデータが持ち出されたことが本社側にばれている以上、現在川島博士がどのような状況に置かれているか掴めないこと、またデータが公表されてしまった暁に彼の身が無事である確証がないことから、一刻も早く彼を連れ出した方が良くと出発を早めたのだ。キツカ自身も追われている身なので安全ではないが、メモリーチップをクオンに預けたことで少し身軽になっていた。

行きに乗ってきたレンタカーは、幸いキツカが乗り捨てたままになっっていた。もともと返却しない——というより返却できない心積りで借りた車であり、よもや同じ車で来た道を戻ることになろうとは夢にも思っていなかったので、彼女にしてみれば皮肉なことではあった。彼女は道を見失わないよう慎重に、しかしできるだけ速い速度で、闇を切り裂いて車を駆った。

車の後部座席には小型のグレネードランチャーが積まれている。出発時、クオンが餞別代わりにとくれたものだ。「こんなの使う事

態にならない方がいいんだけどな」と言った彼の、心配そうな瞳を思い出す。もともと危険な仕事ばかりをしてきた訳だし、危険を退ける自信もあったが、何故か彼に対しては反論する気が起きなかった。

不思議な男だった。元自衛隊員で非人道的な作戦にも参加させられ、手足も失った。ようやく手に入れた幸せも、たったの三年で非道な方法で叩き壊されてしまった。それなのに、彼には歪んだところかひとつもないのだ。その瞳は、種々の過酷な過去に翳ることはあっても、決して希望を見失わない。物腰も穏やかで、どんな局面でも冷静だ。それがもともとの彼の性質なのか、恋人であるハルカという女性の影響なのかは、キツカには分らない。ユナという少女は彼に好意を抱いているように見えたが、それも不思議ないことのように思えた。

そう言えば、ユナはクオンの過去をあのような形で知ってしまい、大丈夫だったのだろうか。自分が現れたせいで、あの少女は知らなくとも良いことを知ってしまったのだな。キツカは漠然とそう思った。

いずれにしても、ハルカという女性にはキツカも興味があった。川島博士からデータを預かった時、彼はキツカのことを「娘のように思っている」と言った。その博士の、本物の娘。一体どのような女性なのだろうか。博士を助け出せば、きっと分かる答えなのだろう。

今日一日で出会った人々や起こった出来事に想いを廻らせながら車を飛ばしていたキツカは、ふいに信じられないものを目にした。ヘッドライトが照らし出す暗闇から、人影が飛び出して来たのだ。彼女は反射的にブレーキを踏んだが、次の瞬間には前方からの強烈な衝撃に車内が激しく揺れ、コンパクトカーの軽い車体はスピン

した。タイヤがアスファルトと摩擦する耳障りな音が鼓膜に突き刺さり、彼女の視界は膨らんだエアバッグで塞がれた。

キツカがエアバッグに阻まれてシートベルトを外すのにもたついていると、突然何かが彼女の右腕を掴み、強い力で彼女の身体を車外へと引き摺り出した。

乱暴に地面へと投げ出された彼女は、反射的に受け身を取りつつその正体を見やった。するとそこには大柄な体躯の男が一人、仁王立ちのような格好で彼女を見下ろしていたのだった。

キツカは身構え、低い声でぽつりと言った。

「……誰だ」

男は答えず、キツカをじっと見ていた。車は何か固い物に衝突した時のように、フロント部分が大きく破壊されている。彼女が跳ね飛ばしたらしき人影は見当たらなかった。これだけ車が壊れているのだから、ぶつかつた人物も無事であるとは考えにくい。周辺に素早く目を配つたが、それに該当するような人物が見当たらない。ただ、目の前に大柄な男が立っているだけで。

その男はにやりと笑うと、キツカに殴りかかって来た。彼女は身体を翻し、それを難なくかわす。

しかし次の瞬間飛び込んだきた光景に、彼女は自分の目を疑った。なんと彼女が今まで倒れていた場所に打ち込まれた男の拳が、アスファルトをやすやすと突き破って地面に穴を開けていたのだ。

当然、普通の人間ではできない芸当である。キツカは動揺を隠しながら、すばやく態勢を立て直して男に向き合った。装備から見れば、この男もやはり合衆国兵のようである。

その男が何者か考えを巡らす間もなく、キツカは右脚で彼の太い首へ回し蹴りを叩き込んだ。しかし男はびくともせず、逆に足首を掴まれて再び投げ飛ばされてしまう。再び叩きつけられる瞬間に受け身を取り、地面を転がる反動を利用して彼女は立ち上がった。

アスファルトを突き破る拳、義体化したキツカの蹴りにも動じない頸椎、そして恐らく、時速約八十キロメートルの車とまともにぶ

つかっても傷ひとつ付かない身体。行きついた答えに、彼女は激しく混乱した。

恐らく彼は、義体化した人間だ。

しかし義体化手術は、キツカの所属する特別情報部 第三課のメンバーにしか施されていないはずである。そのこと自体が課内のトップシークレットだ。

まさか義体化した彼女を追うために、手術を施された者なのだろうか。博士がそれを行うとは思えないし、また信じたくもなかった。それに何より、この男の義体の持つパワーは、彼女が知る限りの義体の能力をはるかに凌駕している。ここまでの強度、筋力を持つ義体は見たことがない。モリノでさえも、この男には力及ばないだろうと思われた。

キツカはホルスターから銃を抜き、躊躇いなく引き金を引いた。続けて二発、三発と急所に撃ち込む。放たれた銃弾はそれぞれ彼の眉間、心臓、左頸部に命中したが、そのどれもが皮膚を傷付けることなく弾かれてしまった。

こいつ、銃も効かないのか。

あまりのことに驚愕したキツカが見せた一瞬の隙を突き、男がその体躯に似合わぬスピードで一気に彼女との距離を詰める。そして彼女の鳩尾にボディブローを叩き込んだ。その激しい衝撃に、彼女の意識は一瞬飛んだ。

気づくと受け身も取れないまま、背中からまともに地面に叩きつけられていた。喉の奥から呼吸が漏れる。鳩尾への衝撃と背中への衝撃で、彼女は横たわったまま身体をくの字に曲げて激しく咳込んだ。

キツカが息を整える間もなく、次に男は右手で彼女の左腕を掴み、まるで人形でも持ち上げるかのように軽々と自分の目の高さまで吊るし上げた。そして空いた左手で彼女の顎を持ち上げ、驚愕で強張った彼女の顔を検分するようにまじまじと見た。暗視ゴーグルの向こう側に微かに見える男の目に下卑た色がちらりと映るのを、彼女

は見逃さなかった。

次の瞬間キツ力は急に解放され、どさりと地面に崩れ落ちた。そしてそのまま仰向けに倒され、組み敷かれてしまった。

「……！ やめろ！ 一体何のつもりだ！」

キツ力が抵抗しようとする、すかさず両腕を押さえ付けられる。「何のつもりか、だって？」

男の口元が、にやりと嗜虐的な笑みを形作った。

「俺はお前を殺せと命令を受けてきたが、犯すなどとは言われてないからな」

彼女は右脚で男を蹴り上げようとするが、下半身もがつしりとホールドされ、びくともしなかった。

「たっぷり可愛がつてやるぜ、かわいい子ちゃん」

男が彼女の耳元に口を寄せ、囁くようにそう言った。その言葉に、彼女は背筋がぞくりとするのを感じた。

考えてみれば、アスファルトを貫く男の拳が彼女の身体を貫けないはずはない。お前など殺そうと思えばいつでも殺せる。そういうパフォーマンスをした上で、彼女を凌辱するために敢えて手加減したのだ。

男は彼女の両手首を左手で押さえ付けたまま、空いた右手で彼女の身体をまさぐり始めた。彼女はそれから逃れようと必死に抵抗を試みるが、腕の拘束が解ける兆候は微塵もなかった。無理矢理暴れようとする度、縫合したばかりの左肩の傷がずきずきと痛む。

「やめろ！ 離せ！ 離せっ……！」

「離すと思うか？」

男が実に楽しそうに言う。口元は相変わらずにやにやと笑みを浮かべたままだ。男の手が服の中に侵入してくる。その右手は、無遠慮に彼女の乳房を揉みしだく。彼女はその痛みに思わず小さく声を漏らし、身を振じらせた。

「なかなかいい反応だな。本当はお前も、して欲しいんじゃないのか？ ん？」

男の下卑た笑顔がキツカの顔を覗き込む。普通の男であれば、こんな状況になってもすぐに跳ね除けられるのに。この男は自分に力があるのを良いことに、彼女の身体を力ずくで好きにしようとしている。最低の下衆野郎だ。キツカは男の顔を思い切り睨みつけた。「睨んだ顔がまた最高にセクシーだな。気の強い女は好きだぜ。特に、気の強い女を押さえ付けて無理矢理ぶち込むのがな」

本当に、最低だ。彼女が無駄な抵抗をするのを、この男は心底愉しんでいるようだった。喉から思わず漏れてしまう苦痛の吐息も、彼にとっては欲望を増長させる嬌声のように聞こえるのだろう。

「しかし殺すのに惜しいくらいにいい女だな。俺のペットにしてやるうか、首輪つけてな」

キツカの頭の中は、今や激しい怒りで満ちていた。しかしそれを相手にぶつけることもできず、ただ異常な力で一方的に抑え付けられるのみだ。

男は、屈辱感で震える彼女の唇を塞いだ。そしてねっとりとした舌を侵入させ、わざとねちゃねちゃと嫌な音を立てて彼女の口内を犯していった。

「んっ……」

キツカは喉の奥で小さく声を漏らした。背筋から立ち上る嫌悪感さえも、男の舌によってぐちゃぐちゃにかき乱される。まるでそれ自体が単体で意思を持っているかのような――

そこでふと、屈辱感で沸騰寸前の脳裏に、冷静な思考が過った。

この男、一体どこまでが義体なんだ？

それまで防戦一方だった彼女は、男に応えるように自ら進んで彼の舌に自分の舌を絡ませた。表側から、裏側へ。優しく吸いながら、やわやわと揉み解していく。するとそれに刺激されたかのように、男の身体がぴくりぴくりと反応するのが分かった。彼女を薄目を開け、長い睫毛の下から男の顔を盗み見る。暗さとゴーグルで表情はよく分からないが、それまで彼女の身体を這っていた手が止まっている。

今だ。

キツカは目を見開き、自分の口内に侵入した男の舌を、思い切り噛み千切った。瞬間的に鉄の味が口の中に拡がる。

男は突然の激痛に身を捩じらせ、思わず彼女を拘束していた手を離した。

彼女はその隙に男の身体の下から抜け出し、身を起こしながら口の中に残った彼の舌先を吐いて捨てた。そして男が呻いている間に、一目散に掛け出す。目指すは彼女が乗って来た車だ。

男に殴り飛ばされたせいで車まで三十メートルほどの距離があったが、男が態勢を立て直して反撃してくるまでには十分な時間があった。キツカは五秒程で車に辿り着くと、左リヤドアを開け、クオンからもらったグレネードランチャーを探した。それは衝突の衝撃で後部座席の下に落ちていたが、損傷はなさそうだった。彼女はそれを引っ掴み、柄の部分で右肩に当てすばやく構えた。

すると舌を噛み切られた男が、怒り狂って文字通り舌足らずに何かを叫びながら、キツカに向かって突進してきた。

キツカは迷わず弾を発射させる。その反動が予想以上に大きく、彼女は思わず尻もちをついた。

撃ち出されたグレネード弾は、轟音を立てながら弧を描いて飛び、男の身体に命中した。

着弾の瞬間、激しい爆発が起こる。

男の動きが予想以上に速かったため、射程範囲より内側で爆風が巻き起こった。キツカ自身も熱波に軽く飛ばされるが、咄嗟に身を伏せて直撃を避けた。

爆風が収まるのを待つて、キツカは身を起こして後ろを振り返った。

薄暗い街灯に照らされた着弾地点には、男の腰から下の部分だけが無残な状態で残っていた。辺りに人肉の焼ける嫌な臭いが立ち込

めている。

彼女はとりあえず、全身義体化男を倒したことにほっとして、すくとんと膝から崩れるように座り込んだ。男の一物をずたずたに踏み潰してやりたい気分だったが、情けないことにうまく立ち上がれそうになかった。

少し遅れて再び怒りと屈辱感が、鳩尾の辺りから湧き上がってきた。圧倒的な力で支配しようとする男。橘菊花という人格を全て否定し、ただ自分の欲望を処理するための道具としてしか見ていない男。これまでにない侮辱を受けた気分だった。

——でも。キツカが女だったからこそ、結果的に命が助かったのだ。あの男がその気になれば、彼女など簡単に殺せただろう。そう思うと、とても複雑な気分だった。

ふと、左腕をつ、と何かが伝って行った。血だ。左肩口の傷が開いてしまったようだった。男に押さえ付けられていた両手首が痣になっている。髪もいつの間にか解けてぼさぼさの状態だし、服もところどころ破かれていた。何より、全身の疲労感が凄い。

シズオ力統制区への道のりはまだまだ遠いが、キツカには休息が必要だった。車も破壊されてしまったため、この宵闇の中、自分の脚で目的地を目指さなければいけないが、それには体力を消耗しすぎていた。

しかしそのこと以上に、またピンポイントで刺客に襲われたことが気がかりだった。

とりあえず、どこか休める場所を探そう。キツカはゆっくりと立ち上がり、身を隠すのに最適な場所を求めて歩き始めた。

■

ユナは自室のベッドに寝転がり、クッションを抱きしめたままぼ

んやりと天井を見上げていた。

今日という一日のことを、とりわけ夕方以降に起こったことを思い出すと心が激しくかき乱され、何をして過ごせば良いか分からなかったのだ。本当なら店の手伝いをしている時間だったが、幸か不幸か店は夕方の一件からまだ片付いていなかったため、今日は臨時休業だった。

「クオンさん……」

ユナは想い人の名前を呟く。それは、存在しない人の名前だった。クドウ・ケイイチ。それが彼の本当の名前だ。でも彼女はそんな人物は知らない。知らない人を好きになって、ちよつとしたことに浮いたり沈んだりしていたのだ。

その知らない人には、恋人がいた。彼は恋人を助けるために、この街に来た。そしてユナと出逢った。

「最初から、全然無理だったんじゃない……」

歳が離れすぎていることもあり、クオンから恋愛対象として見られていないことは分かっていた。でもそれはユナがまだ少女だからで、年月が経てば解決できる問題だとばかり思っていた。彼はいつも穏やかで優しく、今はそれで良いと思っていたのだ。

「全然、駄目だったんだ……」

寝転んだ瞳から零れた涙が、こめかみを伝って髪を濡らした。そして彼が『クドウ・ケイイチ』だった頃のことを想った。

彼が辿った激動の運命。ユナ自身、内戦で家族を失っていたが、彼は自分の身体を失っていた。義体という技術のことは初めて聞いたが、自分のものでない身体を自在に動かせるとは、何だか不自然でショッキングな話だった。そして彼の恋人、ハルカのこと。絶望のどん底にいた彼に希望を与えた女性。一体どんな人だったのだろうか。

「クオンさん、クオンさん、クオンさん……」

キツ力を見送った後、彼はユナを店まで送ってくれた。今日の昼までだったら、彼と二人きりで並んで歩くななんて、この上ない幸運

だと狂喜したに違いない。でもその時ばかりは、全くそんな気分になれなかった。別れ際に彼が「いきなり重たい話聞かせてごめんな」と言った。いつもと変わらない優しい声。彼女が無言で首を横に振ると、それを見た彼はふつと微笑んで、大きな手を彼女の頭にぽんと置いた。とても温かい手だった。その温もりを思い出すと、また涙が溢れてくる。

二人で見送ったキツカは、そろそろシズオカ統制区に到着する頃だろうか。強い意志を持った、特殊作業員の女性。彼女が助け出そうとしているのは、ハルカを目覚めさせることができる唯一の人物だ。ハルカが目覚めてしまったら、クオンはこの街から去ってしまうのだろうか。

ではもし、キツカが博士を助け出せなかったら？
ハルカが永遠に目覚めなかったら？

……そうなったら、彼はユナのことを見てくれるだろうか。

その考えに至り、彼女は自分の中の黒い陰に驚いた。人の不幸を望むなんて、あたしはなんて汚くて醜いんだろう。

彼女はクッションを顔に押し当て、喉から漏れる嗚咽を殺した。
今夜はとても眠れそうになかった。

第7話：三日目（1）「裏切りの予兆」

タイル張りの床は固く、寝床にするには全く適さなかった。

いずれにせよ深く眠り込むと急な敵襲に反応できない危険性があるため、その点は問題ではない。

キツカはすぐ手の届く範囲にライフルとグレネードランチャーを置き、左肩の包帯を巻き直していた。しかし片手で包帯を巻くのは至難の業で、また血もなかなか止まらなかった。早めにきちんとした処置を受ける必要があったが、今は無理だ。おまけにハンドガンも先ほどの戦闘で落としてしまったので、今この状態で近距離での戦闘は非常に不利である。

だから少しでも見通しの良い、五階建てのビルの最上階に身を潜めていた。この辺りは低い建物が多いので、五階建てでも十分に周辺を見渡せる。ここで周囲を見張りながら夜が明けるまで休憩するのが、最適の方法だったのだ。

キツカは包帯を巻くのを諦め、脇の下の止血点を圧迫して出血を止める方法を試みた。

コンクリートの壁に張り付くスチールの窓から満月を見ながら、モリノに連絡すべきだろうか、と思った。時刻は午前二時二十五分を示していた。

命を狙われた状態のまま無人の建物に一人で潜伏し続けるのも、そのうち限界が来るだろう。一人で見張り、一人で状況判断し、敵が来たら一人で応戦しなければならぬ。五体満足でもきついことを、負傷した状態で行わなければいけないのだ。常に神経をぴんと張り、すぐに動けるようにしていなければならない。ひどく精神力をすり減らす作業だ。

とにかくシャワーが浴びたい。純粋な欲求がキツカの頭の中を駆

け巡り始めた。

熱いシャワーを頭からかぶって、全身の汗や血や泥を洗い流した。髪はいつもより念入りにトリートメントするのだ。湯上りにはビールで渴きを潤し、顔に丁寧に化粧水をつける。質の良い水分で身体を満たしたら、温かいベッドに潜り込んでぐっすり眠るのだ。

そこまで想像した後で、キツカは首を横に振った。こんなことばかり考えていても、何の意味もない。第一、きっと今まで住んでいたアパートにはもう戻れないだろう。戻れないと思うと急に胸が苦しくなつて、彼女は驚いた。何の味気もない必要最低限の生活だったが、それはそれで安定していて、安全で、安心感があつた。

それだけはない。

あの違法で危険な任務の数々も、今キツカが置かれている状況から見れば全く大したことではないようにすら思える。なぜなら、彼女は前以て決められた作戦をその通りに行っていただけなのだ。咄嗟の判断の必要は多少あつても、大筋は決まっていた。結局のところ、全てが予定調和だった。

しかし今は違う。敵はどこから来るか分からず、この逃亡劇もいつ終わるか想像もつかない。「会社を裏切ることになる」と川島博士は言つた。結局今までは、会社に守られていたのだ。

神経質な自分にふと嫌気が差し、キツカは見張りに集中することにした。

出血も止まってきたので、軽く包帯を巻きつけて上からコートを羽織る。今のところ、外に異状はない。時折建物の間をすり抜ける風の音がする以外は、特に物音もしない。

モリノに連絡しよう。うまくすれば彼と合流して、博士を会社から連れ出すのに手を貸してもらえらるだろう。

彼女はウエストポーチに手を伸ばした。

その時だった。

「動くな」

背後から突然、男の声がした。チャキ、と銃の撃鉄を起こす音が聞こえる。

考え事をしながらも、キツカは辺りに気を廻らせていたのだ。それにも関わらず、誰かがこの建物に侵入した気配には全く気づかなかった。彼女は背筋が凍りついた。その人物は、完全に気配を消して彼女の背後に立っていたのだ。

「手を上げて、ゆっくり振り返れ」

聞き覚えのある声だった。しかしその声は、いつもとは違う色を孕んでいた。キツカは言われた通り、両手を上げてそろりと声の主を振り返った。

「ソウマ……」

彼女の潜伏する部屋の入口に、ソウマが銃を構えて立っていた。いつものスーツではなく、暗い色のモッズコートを身に纏っている。足元はがっしりした革のブーツだった。その端正な顔には表情がなく、瞬きもせずに彼女を見据えていた。彼は低い声で言った。

「そのまま手を頭の後ろで組んで、跪け」

キツカは言われた通りにした。

「メモリーチップはどこだ」

ソウマが感情のこもらない声で問う。

キツカは答えない。

彼は銃口を彼女に向けたまま、ゆっくりと回り込んだ。

「答えないなら勝手に探らせてもらう」

彼はそう言うと、右手で銃を構えたまま、空いた左手で彼女のポケットやウエストポーチを探った。メモリーチップはクォンに預けてあるので、当然出てくるはずもない。

「……同期のよしみで言ってるんだ。お前には銃殺命令が出ている。メモリーチップを出さないなら、お前を殺す」

「……ソウマ、川島博士はどうしてる？」

ソウマはキツカを睨みつけた。

「黙れ。博士を裏切っておいて、よくそんな口が聞けるもんだな。もう一度訊く。メモリーチップは、どこだ」

キツカは眉をひそめた。

「裏切った？ 私が？ 博士を？ 一体どういう……」

「黙れ」

ソウマがキツカの額に銃口を押し当てる。彼の眼差しは今まで見たことがないほど冷たく、険しかった。まともに視線がぶつかり合い、膠着状態となる。

やがてソウマはコートの内ポケットから携帯端末を取り出し、電話を掛け始めた。室内を満たしていた静寂の中に、彼の携帯端末の呼び出し音が受話部分から微かに漏れ出て、小さく響く。プルルル……プルルル……。呼び出し音が鳴っている間も、ソウマはキツカから視線と銃口を外さなかった。電話は五コール目で、相手につながった。

「ソウマです。タチバナを確保しました。メモリーチップはどこかに隠したようです。……ええ、そうです」

キツカはその会話に耳を澄ましていた。相手の声はよく聞き取れないが、恐らく社内の誰かだろう。

「……そうですか。分かりました、モリノさん」

彼女は、一瞬耳を疑った。今、彼は何と言った？

「了解。また連絡します」

ソウマは携帯端末を内ポケットにしまい、再び両手で銃を構えた。

「ソウマ、今の電話の相手は誰だ？」

「答える必要はない」

キツカは強張った表情でソウマを見上げる。彼は今確かに、モリノさん、と言った。

「今のはモリノさんなのか？ モリノさんは私と一緒に博士からデーターを預かったはずだ。ちゃんと話を聞けば……」

彼女の言葉は、ソウマの放った威嚇射撃によって遮られた。彼女

のすぐ足元から糸のような硝煙が立ち登っている。あと数センチで彼女の膝を撃ち抜こうかというところだった。

「黙れ。裏切り者の弁は聞くなという命令だ。最後にもう一度訊く。メモリーチップは、どこだ。答えないなら、今度はお前の頭を撃ち抜く」

「待て、私にモリノさんと話をさせてくれ。一体何がどうなってるのか……」

その瞬間、ソウマの表情が怒りに歪んだ。彼は両手で彼女のコートの襟ぐりを掴み上げた。

「タチバナてめえ、モリノさんも裏切つといて、何を寝言言ってるんだ！ お前がそういう汚い女だったとは…… 本当に見損なった……！」

互いの鼻先が触れてしまいそうな至近距離で、彼の瞳が怒りにうち震えていた。一瞬その剣幕に気押されそうになるが、キツカは唇の内側をきゅつと噛んで睨み返す。

私がモリノさんを、裏切っただって？ こいつは一体何を訳の分からないことを言っているんだ。

キツカは彼に襟を掴まれた状態のまま、ウエストポーチを探った。「……そうだ、この携帯端末はモリノさんからもらったんだ。博士から二人でデータを預かった後に、緊急連絡用にと、モリノさんから……」

そう言った先から、キツカの脳裏に信じたくない可能性が過っていく。

キツカはこの携帯端末を、メモリーチップと同じくらい肌身離さず大切に持っていた。モリノとつながる唯一の連絡方法だったからだ。

そしてキツカが単独行動を開始した直後から、追手はピンポイントで彼女の居場所を探り当て、襲撃してきた。それは何故だ？

キツカは携帯端末をすりりと手から落とした。固いタイルの床に

当たった端末が、かつん、と乾いた音を立てる。

「そ、んな……」

彼女は力なく膝から崩れ落ち、床に手をついた。

もし。

初めから、モリノが彼女の居場所を追跡するためだけに、この携帯端末を渡したのだとしたら？

端末は電源をオンにしている限り、微弱な電波を発信し続ける。

あの時モリノは確かに、「電源入れといってくれよ」と言った。電波を特定してGPSで辿れば、彼女の居場所を掴むことくらい容易いだろう。

——私はモリノさんに、裏切られたということなのだろうか。

「メモリーチップの在り処を言う気になったか」

力をなくしたキツカを見下ろし、ソウマが落ち着きを取り戻した声で言った。既に戦意を喪失したように見える彼女に対して、もはや銃口も向けていなかった。彼は腰を落として、彼女と目線を合わせた。

「メモリーチップがどこにあるか教える。そうすれば、命までは取らない。お前を会社まで連れていく」

キツカは顔を上げ、ソウマの顔を見た。彼の表情からは感情が読み取れない。感情を押し殺そうとしているのかもしれない。

「……頼む、ソウマ。私の話を聞いてくれ……頼む……っ」

キツカは震える手でソウマのコートの右腕の袖を掴んだ。そして彼の瞳を見据え、詰まったような喉から声を振り絞った。視界が微かに揺らぐ。

そんなキツカの様子にソウマは一瞬たじろいだが、すぐに表情を戻し、軽く鼻で笑った。

「……今度は泣き落としのつもりか。最低の女だな」

ソウマはキツカの手を振り解き、ゆっくり立ち上がった。そして再び銃口を彼女に向ける。

「もついい、お前は殺す」

キツカはがくりとうなだれ、ぎゅっと目を瞑った。万事休すか。ソウマがゆつくりと撃鉄を起こす。そして引き金に掛けた人差し指に徐々に力を入れていく。

キツカは自分自身を抱き締めるように身を固くし、その瞬間を待った。

■

「クオン、終わったか？」

「まだだよ……」

クオンはぐったりとモニターの前に突っ伏した。時刻は既に午前三時を回っている。

「情けねえ奴だな。まだ三時だろうがよ」

「夜行性のお前と一緒にするなよ……」

ミズコシの言葉に、クオンは溜め息を漏らす。

ミズコシは休みなくデータ解析を続けていた。クオンがメモリーチップを持ってここを訪れたのが午後九時頃だったので、丸六時間もモニターを見続けていることになる。

「しかしまあ、この俺がこんなにかかってもまだ解析できないとは、このプログラムを組んだ野郎は一体どんな頭脳してやがんだ。その、例の川島ってセンセイは、プログラミングにも詳しくったのか？」

ミズコシは皮脂で汚れた眼鏡を外して、着ていたシャツの裾でレンズを拭いた。そんな汚れたシャツで拭いたところで、レンズはきれいにならないのではないのだろうか。クオンは心の中でそう思ったが、敢えて口には出さなかった。

「さあ……？ 遺伝子工学の権威だつてことと、腕の良い外科医だつてことくらいしか、俺には分からないよ」

「そうかい。ま、行き詰まってきたところで、ちょっと休憩してく

「ああ」

ミズコシは椅子から立ち上がり、こきこきと首の骨を鳴らしながらストレッチをした。彼は部屋の入り口近くにある長椅子にどさりと身を落とすと、そのまま乱暴に横になり、身体を伸ばす。そして眼鏡を外し、モニターの見過ぎで疲労した瞼を揉みほぐした。

「俺もちよっと、何か飲み物でも取ってくるよ」

クオンはミズコシに続いて椅子から立ち上がると、地下室の重い扉を開けて地上へ上った。

久々に吸う地上の空気は冷たく新鮮で、それだけで生き返ったような気分だった。ミズコシはよくあんなところに一日中籠っているものだ。

クオンは『STUFF ONLY』の扉から店のカウンターへ出た。

店には相変わらず数名の客がおり、今はビリヤードに興じているようだった。カウンターの内側にいたバーテンの男がクオンを見やり、何か飲むかと尋ねてきた。彼はついコーヒーを注文しかけたが、ここはコーヒーを出す店ではなかったことを思い出し、炭酸きつめのジンジャーエールを二杯注文した。

飲み物を受け取って再び地下室へ潜る途中で、クオンはぼんやりとユナの店のことを思い出した。あの店も夜はショットバーになるが、この店の胡散臭さとは比べ物にならないほど健全である。ユナの店は、彼の求める情報こそ手に入らないが、あの場所にいるだけで落ち着いた気持ちになり、ともすればアングラにどっぷり浸かってしまいそうな彼を陽の当たる場所に呼び戻してくれる。彼にとっては大切な、聖域のような場所だった。

その聖域が、昨日襲撃された。

正確に言えば襲撃されたのはキツ力だったが、それにより店の一部が壊れてしまった。彼女に力を貸すことになった分少し後ろめたい気持ちもあったが、あの場に居合わせた者として、日頃世話にな

っている者として、今日の午前中にでもまた様子を見に行こうと彼は思った。

それからあの子は――ユナは大丈夫だっただろうか。思いがけず、ショッキングな話を聞かせてしまった。昨日の帰りも普段の彼女らしくなく、何かを考え込むように押し黙ったままだったのだ。

ユナがクオンに対して好意を持っていることは、彼自身から見ても明白だった。明るくて素直な、普通の女の子。彼とは住んでいる世界が違う。彼女には今後もっと相応しい相手が現れるだろうし、彼のハルカへの気持ちは揺らぐことはない。しかしそれでも、あのような形で彼女を傷付けることになってしまったことに、クオンは申し訳ない気持ちになった。

クオンは再びモニターの前に腰を下ろし、ジンジャーエールを飲みながら作業の続きに取りかかった。もう一杯のジンジャーエールは、ミスコシが座っていたモニターの前に置いてある。この部屋の主は、眠ってしまったのか長椅子に横たわったまま動かない。

クオンはミスコシほどプログラミングに詳しい訳ではないので、このデータの解析作業も結局のところ彼頼みだ。プログラミングはパズルのようなものだ、彼は言う。ピースが嵌れば、一気に全体像が現れるのだ。あの川島医師がどのようなパズルでこのプログラムを組んだのか、クオンには想像もつかなかった。しらみ潰しにいろいろ試していくのも、雲を掴むようで気が遠くなる作業だ。

クオンがちびちびと炭酸飲料を飲みながら睡魔と戦っていると、突然背後でミスコシが跳ね上がるように身を起こした。

「ミスコシ？ どうした？」

クオンが声を掛けても、ミスコシは目を見開いて正面を見たままだった。

「クオン、川島博士は遺伝子工学の権威、だって言ったよな？」

「ああ、そうだけど……」

ミスコシは長椅子から立ち上がると、つかつかとモニターの前に

歩み寄り、乱雑に腰を下ろした。

「……遺伝子の配列……染色体の……ああ、ここが二重構造になつて……」

「ミズコシ？」

ミズコシは何事かをぶつぶつと呟きながら、無心でキーボードを叩いていく。ようやくピースが嵌ったのだろうか。もの凄いスピードで、モニターに数式が打ち込まれていく。彼のいつもの集中タイムだ。こうなってしまったら、何と声を掛けても無駄だ。この光景は初めてではなかったが、つくづく変わった男である。

「解けた！」

ミズコシが声を上げた瞬間、モニターに映し出された無数の記号や式が左端から順番に消えて行き、最終的にデータのロードを示すゲージが現れた。

「やったな、ミズコシ！ お前は天才だ！」

「当たり前のこと言ってるじゃねえよ」

先ほどの睡魔が一瞬で吹き飛んだクオンは、ミズコシの肩を叩く。するとミズコシもそれに応えるかのようにクオンを小突いた。しかし、歓喜の声を上げたのも束の間、画面上に展開された映像を見た二人は、表情を凍りつかせた。

「おいおいおい……何の冗談だよ、これは……」

モニターに映し出された動画は、想像だにできないものだったのだ。

第8話：三日目（2）「襲撃者」

キツカに向けられた銃口から、今にも銃弾が発射されようかというまさにその瞬間だった。

突然階下から、スチールの扉を開ける音が響いた。

それも、無遠慮に勢いよく開け放ったような音だ。勢いが付きすぎてドアノブが壁に激突するような打撃音まで聞こえた。

「何だ？」

突然の物音に驚いたソウマは、身を固くして扉の方を見やる。続いて耳に飛び込んできたのは、地鳴りのような呻き声だった。それが人間のものであるならば、一名ではなさそうである。複数の人間が揃って呻き声を上げながら、このビルの階段を上ってくるようだ。ソウマの気が逸れている隙に、キツカは床に置いていた武器を手元に手繰り寄せた。いずれも遠距離用の銃器だが、いざとなれば打撃にも使用できる。

「おい、何者だ！」

ソウマが五階の階段から階下に向け、声を上げる。何しろ各階一部屋ずつしかない、狭い建坪のビルである。五階から声を張り上げれば、恐らく全館に響き渡るだろう。しかし彼の問い掛けに対する返事はなく、相変わらず不気味な呻き声が聞こえてくるだけである。キツカはライフルを手に取り、音を立てないようにゆっくりと立ち上がった。そして頭の中で、今は彼女に対し背を向けているソウマの頭部を殴り倒すシミュレーションをした。彼はキツカと違って、四肢全てを義体化している。また感覚器官の強化手術も受けているため、動作の途中で気づかれ攻撃を止められる可能性があるが、この部屋に出入り口は一つしかなく、他に選択肢はなかった。

しかし実行に移す前に、思わぬ侵入者によってそれは阻まれた。

「な……なんだ、こいつら……」

ソウマが後ずさりし、部屋の中に戻ってくる。

階段から姿を現したのは、人型をした二体の醜い怪物だった。

全身を岩のような鱗で覆われ、手の爪は一本一本が長く凶暴に伸びていた。肩の部分は不自然に隆起しており、瘤のようになっていた。見開かれた目には瞳がなく、黄ばんだ白眼が宙を捉えていた。常に開いた口からは涎が垂れ、あの不気味な呻き声が発せられていた。その二体の怪物がフロアに上がって来た瞬間から、腐敗臭のようない難い臭いが辺りに漂った。

最初に現れた一体に対して、ソウマが躊躇いなく発砲する。しかし、銃弾はいとも簡単にその皮膚を弾き、兆弾した。

「なんだよこいつ、銃が効かない……！」

攻撃を受けてソウマを敵と見なしたのか、怪物はその太い腕を思い切り彼目掛けて振った。怪物の動きはそれほど速くなく、彼はそれを難なく避ける。空振りした腕は部屋の壁を抉った。コンクリートの壁が、やすやすとひび割れる。

その破壊力に、ソウマは思わず目を見開いた。そして続く攻撃を避けながら、キツカに問い掛けた。

「タチバナ！ お前、装備は？」

「グレネードとライフル。拳銃は落とした」

先ほど手に取ったライフル——他でもない、ソウマを攻撃しようとしていた武器——と床に置いたままのランチャー銃に一瞬目をやり、キツカは平坦な声で答えた。

その回答にソウマは軽く舌打ちする。彼は懷からもう一丁の銃を抜くと、キツカの方へと放った。床に当たった銃はくるくるとスピリンしながら、彼女の足元へ滑ってくる。

「援護しろタチバナ！」

先ほどまで殺されそうになっていた相手からの援護要請に、キツカは一瞬むっとしたが、文句を言っている暇はなさそうだった。ソウマを攻撃している一体の後ろから、二体目の怪物が彼女目掛けて突進してきたのである。

彼女はすばやくライフルを捨てて銃を拾い、怪物を避けつつ跳び退った。着地の際に左手をついた時に、せつかく止血した肩の傷口が三度開くのが分かった。

キツカは、数時間前に自分を襲ってきたサイボーグ兵のことを思い出していた。この怪物には明らかに理性がなく、ただ目の前の相手に攻撃を繰り返しているだけだったが、銃弾を弾く皮膚やコンクリートの壁を抉るパワーなど類似点も見られる。

——あの男、舌は生身だったな。

ふとあの嫌な感触を思い出したが、すぐに頭から追い払った。こいつらも、口の中や目などは攻撃が効くのではないだろうか。

キツカは試しに、その怪物の口を狙って発砲した。一発目は僅かに逸れて兆弾したが、二発目は命中した。口の中に銃弾を撃ち込まれた怪物は酷い叫び声を上げ、ヘド口のような体液を吐き出して一瞬動きを止めた。しかし倒れることはなく、次の瞬間には痛みに悶えるように更に激しく暴れ出した。

「口の中は、一応効いてるみたいだな。ただしこいつも暴れられちゃ本末転倒だ」

そう言いながらも、ソウマも対峙する怪物の開きっぱなしの口内に、二発連続して撃ち込む。するとこちらも体液を吐き出し、悶えて暴れ出した。痛みでコントロールを失った二体の怪物は、互いにぶつかり合いながらも動きを止めず、周囲の壁を破壊し続けた。

縦横無尽に動き回る巨体に、二人は互いに背を預け合う格好で身構えた。

「おい、この隙に脱出するぞ」
「了解」

先ほどはソウマに対して苛立ちを感じたキツカだったが、今やすっかり平常心に戻っている。彼とはこれまでも何度か合同で任務を行っていた。いけ好かない相手だが、呼吸は合わせやすい。

二人は暴れる怪物の隙間を縫って部屋の出入り口に向かう。

しかし唯一の脱出口である階段からは、更に二体の怪物が上って

きていた。

「くそ！ このままじゃ埒が明かない！」

ソウマは舌打ちをして、部屋に引き返した。残る脱出口は――外へ続く窓だ。ただし、ここは五階である。義体化した二人であっても、無事に着地できるかは怪しいところだった。しかし他に選択肢はない。

「ソウマ、さっき私を襲ってきた奴も銃が効かなかったが、グレネードで倒した。部屋の中で爆発させたら巻き添えを喰らうが、爆発の瞬間に外へ飛び出せば……」

キツカの言葉に、ソウマは頷く。

「俺はワイヤーロープを持っている。一人ならこれで下まで一気に降りられるだろう」

二人は一瞬視線を合わせ、すぐさま怪物を避けながら窓へと駆け寄った。

スチールの窓を開け放ち、まずはソウマがワイヤーロープのフックをサッシに引っ掛ける。そしてそのままワイヤーを伝って一気に下りていった。

その隙にキツカは窓際に置いていたランチャー銃を拾い上げた。ソウマが建物の中ほどまで下りたのを確認してから、彼女自身もサッシに足をかける。彼女は外に対して背を向けた状態で窓の縁に立ち、部屋の中に向けランチャー銃を構えた。そして後ろ向きに縁を蹴ると同時に、グレネード弾を発射した。

銃の発射の反動と、一瞬遅れて来た爆風に勢いをつけられ、キツカの身体はかなりのスピードで落下していく。

爆破された建物の破片が散る空中でどうにか勢いを殺そうと身体を捻るが、然程効果はなかった。このままではコンクリートの地面に激しく叩きつけられ、無事ではいられないだろう。彼女は来たる衝撃に身構えた。

地面まで残り僅か二メートルというところまで落下した辺りだっ

た。

先に地上に降り立っていたソウマが助走をつけて地面を蹴り、空中でキツカの身体を抱き止めたのだ。ソウマはキツカを抱き締めたまま背中から着地し、勢い余って二度三度地面を転がった。

「痛つてえ……」

着地した背中中の痛みよりも、二人の身体の間挟まれたグレネードランチャーに胸部を圧迫され、ソウマは小さく呻いた。キツカはすぐに身を起こすが、傷口の開いた左肩に鋭い痛みが走り、小さく顔をしかめた。

爆破したビルの五階部分からはもうもうと煙が上がり、ぱらぱらとコンクリートの破片が降り注いでいた。中の様子は下からでは分からないが、怪物が落ちてこないところを見るとグレネード弾で一掃できたらしい。ビルの外にも怪物がいるのではないかという懸念はあったが、先ほどの四体だけだったようだ。

先ほどの爆発音が、残響となって耳を塞いでいる。二人はそのまましばらくの間、茫然とビルを見上げていた。

やがて、おもむろに身を起こしたソウマが、ポケットから携帯端末を取り出す。会社に連絡するつもりなのだろう。しかし彼は液晶画面を何度かつついた後、軽く舌打ちして端末を投げ捨て、再びどさりと横たわった。

「畜生、壊れてやがる」

地面に投げ出された彼の端末は、画面が大きく割れ、もはや起動しなくなってしまうていた。大方、ランチャー銃の突起に押されて破損してしまったのだろう。

辺りには、ビルのコンクリートの崩れる音だけが響いていた。爆発音の余韻も既に耳の奥から消え去っている。

「ソウマ……私を助けて、良かったのか……？」

再び訪れた沈黙に、先に口を開いたのはキツカだった。その言葉に、隣で大の字に横たわったままの男が憮然とした表情になった。

「……お前を殺すのは、この俺だ」

キツ力は小さく溜め息をついた。左肩の傷からの出血がコートの中で腕を伝って、指先で滴となる。彼女は思わず右手で肩を押さえた。

「お前、肩どうした？」

「昨日……いや、一昨日の夕方の戦闘でやられた傷が開いただけだ。別に大したことじゃない」

自分の不注意によって被弾した傷だ。それをソウマに知られるのは、何となく嫌だった。

「そういえばお前さっき、同じような奴をグレネードで倒したとか言ってたな。あいつらは一体何なんだ？」

「……私が知りたいくらいだ。ただ、これの前に私を襲ってきた男は、合衆国軍の装備だった」

ソウマは身を起こし、眉を顰める。

「合衆国軍？　どういうことだ」

怪訝な表情の彼を、キツ力は見据えた。

「経緯を話すよ。その前に、傷を手当てしてくれ」

■

モニターに映し出されたのは、どこかの研究室のようだった。

画面中央には手術台があり、がっしりした体格の男が大の字に寝かされている。手足には枷がはめられ、動きを拘束されているようだった。その様子が斜めの俯瞰で映っていることから、カメラは部屋の天井の角に設置されているようだ。台の周りには白衣姿の人物が三名おり、そのうちの一人が大振りの注射器を持って横たわる男の傍らに立っていた。

「川島先生……？」

映像が荒く分かりづらかったが、それは確かに川島医師だった。

クオンは目を凝らして、画面の中の医師の姿を注視した。彼の記憶にあるよりも、頭髮の白の割合が増えている。

ミズコシが隣で眉根を寄せる。

「一体何をしてるんだ？」

やがて画面の中の川島医師は、手にした注射器を台の上の男の腕に刺した。注射が終わった後、周囲の三名はしばらく男の様子を見守っていた。その約十秒後、注射された男は激しく暴れ始めた。

ミズコシが震える声で言う。

「これ、ナショナル・エイド社の実験データって言ったよな？ これじゃまるで人体実験じゃねえか……あの会社はこんなことをしてるっていうのかよ……」

私は患者さんを実験対象と思ったことは一度もありません。確か、川島医師はクオンにそう言ったはずだ。

「先生……嘘だろ……」

クオンは独り言のように呟く。不安を掻き立てるざわざわとした闇が、心の中に入り込んでくるような感覚だった。しかしその後の展開は、もっと信じられないものだった。

台に横たわった男の身体が、突然変質し始めたのだ。

注射を打たれた腕の部分から血管が紫色に膨れ上がり、次第に皮膚全体の色が変色する。血管は沸騰したようにぼこぼこと異常にうねり、破裂した。身体の内から血液が皮膚を突き破って外へと飛び出す度、男が咆哮を上げる。

ミズコシが口元を抑えた。

「一体、何だっけ言うんだよ、これは……。B級のサイコスリラーみてえじゃねえか……」

モニターの中の男は、いつの間にか全身を変色した血液で覆われていた。それは既に液体ではなく、表面で固まって岩のような質感となり、皮膚を鱗のように覆い尽くしていた。彼はもはや暴れてなどいなく、その容姿は人間とは呼べないほど醜いものに変貌していた。しばらくして、岩のような鱗に覆われた四肢がぼこりと膨れ上

がる。その瞬間、『彼』は活動を再開し、まずは四肢を縫いとめる枷をいとも簡単に引き千切った。拘束が解けて手足の自由を取り戻した『彼』は、一番手近にいた白衣姿の助手らしき人物の顔を掴み、そのまま頭部を握り潰す。その人物は抵抗する間もなく手足をだらしと下げ、絶命した。

「もうやめてくれ……」

クオンは頭を抱え首を振ったが、映像はまだ続いている。

助手が怪物に変質した『男』に殺される間に、川島博士ともう一人の助手は画面から姿を消していた。怪物はその後手術台の周辺で破壊活動が続いていた。横に置かれていた、様々な器具を載せた台車を軽々と投げ飛ばし、何かの装置を中心に真つ二つにへし折る。自分が横たえられていた台を叩き壊し、その真上にあつた手術用の照明器具も叩き落とした。いずれも驚異的な破壊力である。『彼』に踏み潰された助手の遺体はズタズタだった。

やがて、画面全体が白い霧のようなもので覆われる。すると途端に『彼』は苦しみ悶え始めた。霧のようなものは、毒ガスだろう。

『彼』は瓦礫の山と化した実験室の中でのたうち回り、口からヘド口のような体液を吐き出す。そのうちにその動きも徐々に弱くなり――映像はそこで終わっていた。

「何だよ……何だよこれ……川島先生……！」

クオンは頭を抱え、うなだれた。再び静寂を取り戻した地下室に、ハードディスクの動作音が重く響く。

コールドスリープに入る直前、ハルカを頼むと言った川島医師の瞳は、確かに良識と信念を湛えていた。しかしモニターに映されていたものは、良識や信念とは程遠いものだった。かつて人命を救おうと自ら戦場近くに病院を構え、リスクを冒しながらも負傷者に分け隔てなく手当てを施した医師は、五体満足な人間を拘束し理性を持たない怪物へと変える非人道的な人体実験を行う研究者になってしまったのだ。

「クオン……このデータ、どうすればいい？ ネットに流そうと思

えば、すぐにも作業に取り掛かるけどよ……」

ミスコシの問い掛けに、クオンは顔を上げた。

「俺には、これを世間に公表していいかどうか、分らない。ただ……」

「ただ？」

クオンは両手を握り合わせ、額に当てた。義体の右手と、生身の左手を握った拳を。

「俺は、川島先生がどういうつもりなのか、本人の口から訳を聞きたい。これを公表しろとキツカに預けたのは、先生自身だって言うんだからな」

そうかい、とミスコシが相槌を打つ。

「じゃあ、依頼人の依頼人の意向に従うってことだな」

「ああ」

ミスコシがぼりぼりと頭を掻く。

「とりあえず、ちょっと休もうや。あんまり思い詰めんなよ」

ぼんぼんと肩を叩かれ、クオンはようやく息をついた。

「ああ、悪い……」

クオンは椅子の背もたれに体重を預け、薄暗い地下室の天井を仰ぎ見た。今の彼に唯一できるのは、キツカが無事に川島医師を連れ出してハママツ自治区に戻ってくるのを待つことだけだった。

第9話：三日目（3）「共闘戦線」

ソウマが乗って来た車は、キツカが潜伏していたビルから一キロメートル程離れた、国道一号線沿いの道路脇に停めてあった。彼女が持っていた携帯端末のGPSを目印に来た彼は、車のエンジン音で接近を気づかれないよう、十分な距離を取って徒歩でアプローチしたのだ。

「後部座席に乗れよ」

ソウマに促され、キツカはその四駆車のリヤドアから車に乗り込んだ。その間に彼はハッチバックを開けて救急キットのボックスを取り出し、反対側のドアから後部座席に乗り込む。この車は社有車なので、大抵のものは揃っているのだ。

「……とりあえず、服を脱げ」

ソウマがぶつきらばうに言う。

——まったく、デリカシーのない男だな。

キツカは一瞬躊躇うふりをして見せてから、まずは血で汚れたショートトレンチを脱いだ。その下から、サイボーグ兵に破かれたタンクトップが現れる。その不自然な乱れ方と彼女の両手首の痣に目を留め、一瞬ソウマが何かを言いかけたが、結局やめたようだった。既に左肩の部分がかなり血に染まっていたので、彼女はこれも脱ぎ去る。上半身をアンダーウェアだけの状態になった彼女は、左の肩紐から腕を抜いた。その瞬間に下着の胸元がかなり際どいところまで下がり、彼が慌てて視線を逸らすのをキツカは視界の端で捉えていた。包帯は彼女が乱雑に巻いたままになっており、傷口の部分がかなりの量の血液が滴っていた。

「……よろしく」

長い髪を全て右側によけ、首筋も鎖骨も露わな状態で、キツカは辛うじて胸元を押さえながら小さくそう言った。

ソウマは無言で手当てをしていた。汚れた包帯を取り去り、破けた傷口に消毒液を浸み込ませた布を当てる。その際に彼女が一瞬身体をぴくりと強張らせたが、彼は特に手を緩めることなく淡々と消毒を続けていく。消毒の終わった傷口に新しい清潔なガーゼをあて、その上からきつちりと包帯を巻く。無駄のない、見事な手際の良さだ。

「終わったぞ」

ソウマが抑揚のない声でそう告げる。

「ありがとう」

キツカも、特に目も合わさず小さな声で礼を言う。

その後しばらく、無言の時が続いた。

——何か言えよ。

キツカは内心少し苛立ちながら、話を切り出すタイミングを伺っていた。普段はいらぬことばかりべらべらと話し掛けてくる癖に、手当の最中から話し始めれば良かったのかもしれないが、何となく言葉を発しづらい雰囲気だったのだ。

そのままキツカが押し黙っていると、突然何かが彼女の口元に触れた。

「お前、口も切れてるぞ」

それはソウマの指だった。キツカは驚いて、思わず彼の顔を見た。そこでふいに、お互いの視線がぶつかった。もし目の前に鏡があったら彼女は、今の自分がどれほど無防備な表情をしていたか分かっただろう。ソウマは妙に真面目な顔で、彼女を見据えていた。普段の彼はいつも挑発的な笑みを浮かべている印象しかなかったのだ。こんな真顔はあまり見たことがなかった。

「あ……いや、これは大したことないから……」

恐らくサイボーグ兵の舌を噛み切った時に相手の血液が付いたものだろうが、どう説明していいのかキツカには分からなかった。彼女がやっとでそれだけ言うと、彼は「そうか」とだけ小さく呟いて視線を逸らした。そしておもむろに着ていたモッズコートを脱ぎ、

彼女の方へ放った。

「着てろ」

「あ、ああ……、ありがとう」

ソウマの意外な行動に面食らいながらも、キツカは渡されたコートに腕を通した。

「お前、何があった？」

その様子を横目で見ていた彼が、怒ったような口調で問い掛ける。今の一連の流れから、恐らく服装の乱れや手首の痣のことを訊いているのだろう、とキツカは思った。彼女がレイプされたと思っているのかもしれない。

しかし、そのことに焦点を当てすぎて話の主旨が曖昧になるのも本意ではない。キツカはそれに気づかなかったふりをし、気を持ち直して最初から話を始めることにした。

「一昨日の午前中、川島博士に呼び出されたんだ。正式な呼び出しじゃない。私の端末に直接連絡があった。研究棟に出向いたら、そこにモリノさんもいた」

ソウマは特に相槌を打たず、目だけで促した。

「そこで博士から、実験データの入ったメモリーチップを受け取った。モリノさんと私、一枚ずつだ。博士は私たちに、そのデータを持ち出して世間に公開してほしい、と言った。そしてそれは会社を裏切る行為だとも」

人智を超えてしまったという実験のことや、川島博士の酷く後悔したような様子。少なくとも、博士があの時嘘を言っていたとは、キツカには思えなかった。

「兎にも角にも私たちは、博士の申し出を受けた。そしてモリノさんと別れる時に、緊急連絡用にと携帯端末をもらった」

思えば、これがそもその発端だった。彼女が後生大事に持っていた端末からのGPSで、恐らく自分の居場所を教えていたのだ。別れ際に握手したモリノの手の温かさを思い出し、じくりと胸が痛

んだ。

「私はその日会社を早退して、すぐにハママツ自治区に向けて出発した。ハママツに入る手前で、三人の追手に襲撃された。そいつらは合衆国軍の銃を持っていた」

「合衆国軍……」

それまで黙って聞いていたソウマが、ぽつりと口を開いた。キツ力は頷く。

「その後、自治区内で襲ってきた奴らもやはり合衆国兵だった」

「それがさつき言ってた奴か？」

キツ力は首を横に振る。

「さつき言ってた奴は、自治区を出てからのことだ。そいつは単独だった。時速八十キロの車を身体で止めて壊した。アスファルトも拳で破壊したし、銃も弾いて効かなかった」

「あの怪物と同じような奴か？」

キツ力はそれにも首を振る。

「違う。そいつは、ちゃんとした人間だった。自分の意思で行動していた。あいつは多分……全身を義体化したサイボーグ兵だ」

自分の意思で、キツ力を殺す前に犯そうとしたのだ。

ソウマは怪訝そうな顔をする。

「義体化？ 俺らの他に、義体化手術を受けた奴がいるってことか？」

分からない、と彼女は答える。

「ただ、そいつもやっぱり合衆国軍の装備だった。私たちの知らないところで、義体化兵が作られているのかも知れない」

ソウマは眉間に皺を寄せた。

「じゃあさっきの怪物も、合衆国軍の差し金なのか？」

「さあ……その可能性は、あると思うけど。合衆国軍の連中が私の追手として掛っていたこと、社内では知らされてないのか？」

「ああ、聞いてないね。俺たちはモリノさんから、お前が裏切ってデータを持って逃走した、という話を聞いたただけだ」

彼の口からモリノの名前が出たところで、キツカは気づかれないように小さく息を飲んだ。

「モリノさんは、そのことについて何て？」

「川島博士にモリノさんとお前が呼び出されて、データを預かったってところまではお前の話と同じだな。モリノさんは、博士からメモリーチップの『移送』を頼まれたという言い方をしたけどな。」

博士の部屋を出て二人になったところで、お前がメモリーチップと携帯端末をモリノさんから奪って逃げた、と」

「そんな滅茶苦茶な話……」

キツカが、信じられないという表情でソウマを見る。あのモリノがそんな出鱈目を言って彼女を陥れようとしたなんて、想像もできない。

「ともかく、それで昨日お前に銃殺命令が下った。社内の最重要機密のデータ漏えいの犯人だと言ってるな。ただ、『社内の機密データ』を追うのに、合衆国軍が動いてるなんて話は聞いてない」

「……川島博士は、何て？」

キツカは胸が潰れるような思いで、その問いを口にした。

もし、川島博士とモリノが共謀して、彼女を陥れようとしていたのだとしたら。彼女が今まで信じていたものが、まやかしたかったら。博士と、モリノと、本社と、合衆国軍と。皆が口裏を合わせて、彼女に罪を着せて消そうとしているのだとしたら。

彼女は知らず知らずのうち、右手でコートの左腕の部分を握っていた。その拳が、小さく震える。これまでは自分の信じるものためにどんなことも乗り越えてきたが、それが触れられない霧のようなものだ気づいた今、彼女を取り巻く全てのものが怖くて堪らなかった。

ソウマはそんな彼女の様子を見やり、しかし表情を崩さず口を開いた。

「いや、博士には会ってないな。何しろ至急の任務だと言われたから、博士の話を聞くような時間はなかった」

そう言いつつ、彼は右手で軽く顎に触れた。事の真相について思考を巡らせているようだった。

「お前の居場所はモリノさんに教えてもらったんだ、GPSを使つて。これまでお前がピンポイントで刺客に襲われたのは、モリノさんが合衆国軍にお前の位置情報を渡していたからだろう」

彼は小さく息をつく。彼の瞳にもまた、迷いの色が映っていた。

「……俺は、モリノさんにお前を確保したことを伝えていた。つまり、お前と一緒にいることは知っていた訳だ。俺が巻き添えになるのを分かっている、モリノさんがあの怪物を差し向けたんだとしたら……」

二人は無意識のうちに、顔を見合わせた。

私たちは一体、何に巻き込まれているんだろう？

「ところでタチバナ、メモリーチップはどこへやったんだ？ あの中身は、一体何なんだ？」

全ての元凶となった、メモリーチップ。そのデータに関して、キツカという『反逆者』を仕立て上げる理由は何だ？

ソウマにクオンの話をすべきかキツカは一瞬迷った。しかし今の状況では彼の協力を得ないことには、どうにも身動きが取れそうにないこともまた事実だった。

「……データは、ハママツ自治区である人物に預けた。その人は、博士のことをよく知っていた」

キツカはクオンの話をした。コマキ内戦のこと、川島博士がナシヨナル・エイド社に来る前にコマキ自治区で開いていた病院のこと、一般用の義体のこと、眠ったままになっている博士の娘・ハルカのこと。

「クオンは、ハルカさんを目覚めさせるために博士を探していた。だから彼に博士を引き合わせる交換条件で、データを託した。私はまだデータの中身は見えていない。どちらにしても、博士に会わないことには何も分からないんだ」

クオンの切な願いが頭を過り、胸が苦しくなった。クオンもまた、

川島博士を信じていた。しかし彼との約束はキツカ自身が引き受けた問題であり、ソウマには何の利害もない。

だが全ての元凶となっている川島博士の実験データ、もしくは川島博士自身の身柄については、ソウマにとってもメリットのあることだろうと思った。

「それでお前は、俺に協力しろと言う訳か」

ソウマがキツカを見据えて言う。彼女は軽く頷き、彼の正面に向き直った。

「無理にとは言わない。あんたが私を気に入らないのも知ってる。私を殺せと命令を受けているのも。でも、あんたは私を助けた。このまま会社に戻ったらあんたも反逆者と見なされるかも知れない。モリノさんがどういうつもりかも分からない。でも確実なのは、この件に関して博士が一番のキーパーソンということだ。本社にとっても、合衆国軍にとっても、モリノさんにとっても、私にとっても……そして恐らくソウマ、あんたにとっても」

しばらく無言でキツカを見据えていたソウマが、諦めたようにこめかみを指で押さえた。

「……とりあえず、会社に戻ればいいのか？」

キツカはほつと息をつく。

「……ありがとう」

「別にお前のためじゃない。単に利害が一致しただけだ。俺は俺のために戦う」

そう言ったソウマの口調には、いつもの皮肉めいた色が戻っていた。

川島博士が、陰謀に加担していたとしたら。データをキツカに運び出させ、なおかつ反逆者として消そうとする理由は？

——カムフラージュ。

かねてから、合衆国軍との黒い繋がりが噂されていたナショナル・

エイド社。ダミーのデータを世間に漏れいさせる大袈裟なパフォーマンスをし、それを持ち出した特殊工作員を計画の首謀者として処分することで、世間に「黒い計画は立ち消えた」と思わせる。一度事が沈静化すれば、人々は安心する。その目を逸らした裏で、真の計画を遂行する――。

あり得なくはないシナリオだ。

しかしその可能性を、キツカはどうしても信じたくなかった。

もし、あの日川島博士が彼女に語った言葉が真実だとしたら。自分が携わる黒い計画を世に晒して、信念を貫き通そうとしているのだとしたら。

そうなれば彼女は、何が何でも博士を助け出さねばならない。裏切り者のモリノから、博士の尊い意志を守らねばならない。

ソウマの運転する車がシズオカ統制区に到着したのは、午前七時半すぎだった。

彼は車を、シミズ支社のビルが見える高台に停めた。社有車で会社に接近すると、発見される危険があるからだ。日の出から約一時間。緩い日差しはひんやりした朝の空気を暖めるには至らず、乾燥した空気を通して見る会社のビルは何故だか見知らぬ建物のように映った。

ここまでの道のり、彼らを襲う者はいなかった。あの携帯端末は怪物もろとも木端微塵になったので、キツカの位置を特定できなくなったのだらう。そして偶然とはいえ、ソウマの端末も起動不能になったことは不幸中の幸いと言える。奇しくもあの怪物のお陰で、彼らは刺客の追跡を遮断することに成功したのだ。

川島博士が敵か味方かということについては、考えても出ない答えだった。しかし仮に味方だった場合、彼は研究棟に軟禁されているだらうという結論に行きついた。博士が真実を話して助けを求めたりしたら、本社側の計画が破綻してしまうからだ。

しかし敵だった場合は……敢えて考えないことにした。

「さすがに会社の建物に合衆国兵を配置するとは思えない。三課のメンバーは、個別任務がある奴以外はお前の捜索に出ていると思う。つまり見張りがいるとしても、ただの警備員だ」

ソウマの言葉に、キツカは顎に指をあてる。

「警備員は三交代制だったな。次の交代は八時か……」

だとすれば、警備員の交代が終わってから侵入した方が良い。せっかく黙らせた警備員を、交代の警備員に発見されては厄介だからだ。

「どうやって侵入するつもりだ？」

「いつも通り、下水かな。以前任務で、研究棟の敷地内のマンホールを使ったことがあるんだ。その時に周辺の水路はひととおり確認したから、研究棟の建物内につながる道も覚えている」

「分かった。本当に一人で大丈夫なのか？」

キツカは軽く肩をすくめて見せた。

「一人の方が身軽で良いし、これは私の仕事だ。それに……」

彼女は一瞬、視線を落とす。しかしすぐにソウマに向き直り、僅かに口角を上げた。

「万が一戻って来れなかったら、ハママツにいるクオンに伝えて欲しいんだ。データは破棄しろ、と。約束を守れなくてごめん、と」

キツカの覚悟を決めたような幽かな微笑みを、ソウマは表情を変えずに見据えた。

「……俺はここで待機してるから、九時までに戻ってこい。それ以上は待たない」

ソウマのその言葉は、静かな車内にしんと響いた。変に引き止めたりしない彼に、キツカは感謝した。

そして彼女はきっぱりとした口調で言う。

「了解。懐中電灯を貸してくれ」

ソウマは車内にあった備品の懐中電灯を彼女に渡した。

「ところで、肩の傷は大丈夫なのか？」

「おかげさまで落ち着いてる。激しい戦闘をしなければ、多分大丈夫だ。……早めにハママツに戻って、処置を受けるよ」

「そうした方がいい」

キツカはコートの内側に銃を挿す時に、ちらりと左肩の傷を確認した。丁寧に巻かれた包帯は、きつちりと傷口をホールドしている。キツカがすばやく身支度を終えて車から出ようとした時、ソウマがふと声を掛けた。

「タチバナ。そのコートは貸してるだけだからな」

彼の双眸が、いつになく真剣な表情で彼女を見つめている。彼女は一瞬怪訝な表情をしかけたが、すぐに彼の言わんとすることを理解し――。

思わず、吹き出した。

「……あんたって、そういうこと言うタイプだったんだ……！」

よもや笑われるとは思っていなかったのか、それともキツカがふいに見せた笑顔に驚いたのか、ソウマは一瞬ぽかんとし、その後すぐにむっとした表情になった。

「うるさい……本当にお前は可愛くない女だな」

なおもくすぐすと笑い続けるキツカに、ソウマは心底面白くなさそうな顔をする。その頬が若干紅潮している気がするの、怒りのせいなのか気恥ずかしさのせいなのか分からない。

キツカは口元の笑みを抑えながら言う。

「分かったよ。このコートは借りてるだけだから、無事に戻って必ず返す」

「……もういいから、早く行け」

ソウマが虫を払うような仕草で掌をひらひらさせる。今まであまり彼とまともに話をしたことはなかったが、案外可愛いところもあるのかもしれない。

何にせよ、九時までに戻ってこなければ。その時に一人なのか、それとも博士を連れて二人で戻ってくるのか、まだ分からない。キツカは表情を引き締めて、車を降りた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3684z/>

無神論者たちの唄

2012年1月1日22時48分発行